

## 市内遺跡調査概報 X III

——平成14年度 東木津遺跡・越中国府関連遺跡の発掘調査他——

2003年3月

高岡市教育委員会

## 序

高岡市内には、旧石器時代から近世にいたる埋蔵文化財包蔵地が200箇所以上も確認されております。そして、これらの調査をつうじて、脈々と繰り返されてきた当地の歴史像が日々明らかになってきているところです。

平成14年度は、個人住宅の建設をはじめとする開発行為にともない、17箇所の試掘調査を実施させていただきました。

このうちの東木津遺跡におきましては、すでに過年度の調査により、古代における公的施設が所在したものと考えられておりますが、今回の調査におきましても、当該期の遺物が多量に出土したことから、上記の考察を補強することとなっております。また、越中国府関連遺跡では、多数の古代瓦の他、細片ながらも瓦塔が出土し、越中国において威容を誇った圓分寺の片鱗を垣間見るための資料を追加した可能性がもたれております。

さて、当地につきましては越中国府がおかれ、かの万葉歌人の大伴家持も国守として赴任した地であり、古代においては政治経済や文化の中心的役割をなす存在でした。したがいまして、本書におさめました調査成果につきましても、律令政策をすすめ、また、その一方では精神的な拠りどころとして寺院を建立していくといった、いにしえの人々の姿を垣間見る手立てとなることと思われます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりまして、ご理解やご協力をいただきました、関係各位ならびに地元の皆様方に、深く感謝をいたします。

平成15年3月

高岡市教育委員会  
教育長 細呂木 六良

## 例　　言

1. 本書は、富山県高岡市において、平成14年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 本書に掲載する調査は、個人または法人の開発行為にともない実施したものである。
3. 当調査は、平成14年度国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施したものである。
4. 本書においては、試掘調査を行った合計17件の調査地区を掲載した。ただし、出土遺物や遺構を検出した6件については詳細を報告し、それ以外のものは一覧表にまとめるとした。
5. 調査関係者は以下のとおりである。

課　長　大石茂

課長補佐　天谷隆夫

課　員　根津明義、荒井隆、太田浩司

4. 現地調査及び本書の執筆については、上記した3名の課員が分担して行った。
5. 現地調査や報告書の作成、その他行政事務の推進にあたっては、以下の各氏から指導・協力を得た。  
池野正男　岡本淳一郎　久々忠義　小島俊彰　鈴木景二　高梨清志  
西井龍儀　山本正敏（五十音順、敬称略）
6. 本書においては下記の記号を用いて遺構の分類を行った。  
S B：掘立柱建物　S D：溝状遺構　S F：道路遺構　S K：土坑  
S X：その他の遺構
7. 本書に掲載する出土遺物は、下記のように通し番号を付した。  
1001～須恵器、2001～土師器、3001～陶磁器類、4001～石製品、  
5001～土製品、6001～古代瓦

## 調査参加者

### 屋外調査

池田昌美　石田敏行　岩瀬政顕　桶谷潤　柏島大輔　河原康弘　黒田忠明  
神塙友里　小林央　佐野寅　沢田和明　高嶋輝雄　瀧律子　竹内喜三　畠山行男  
中田郁子　中山賛實　馬道弘　藤井美紀　山崎一男　山城一夫

### 室内整理調査

池田昌美　岡田一広　桶谷潤　神塙友里　小林央　瀧律子　田中美穂子  
中田郁子　藤井美紀

（五十音順 敬称略）

高岡市埋蔵文化財調査概報第50号  
市内遺跡調査概報X III

目 次

東木津遺跡（田中医院地区）

序説	2
検出遺構	6
出土遺物	17
まとめ	18

瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）

序説	20
検出遺構	24
出土遺物	25
まとめ	26

東木津遺跡（島宇地区）

遺跡概観	28
調査概要	28
検出遺構	29
出土遺物	29
まとめ	30

越中国府関連遺跡（奥村地区）

遺跡概観	34
調査概要	35
検出遺構	35
出土遺物	37
まとめ	40

下佐野遺跡（黒越地区・荒木地区）

遺跡概観及び調査にいたる経緯等	42
黒越地区・検出遺構	42
黒越地区・出土遺物	43
荒木地区・検出遺構	43

その他の調査区の概要 ..... 45

挿 図

図1. 東木津遺跡・位置図	1
図2. 東木津遺跡（田中医院地区）・調査区位置図	2
図3. 東木津遺跡と関連遺跡地図	3
図4. 東木津遺跡（田中医院地区）・全体概略図	5
図5. 東木津遺跡（田中医院地区）・全体図	7
図6. 東木津遺跡（田中医院地区）・北西部遺構図	8
図7. 東木津遺跡（田中医院地区）・北東部遺構図	9
図8. 東木津遺跡（田中医院地区）・南西部遺構図	10
図9. 東木津遺跡（田中医院地区）・南東部遺構図	11
図10. 荒木津遺跡（田中医院地区）・道路址S F 0 1 実測図	12
図11. 荒木津遺跡（田中医院地区）・溝S D 0 8 実測図	12
図12. 荒木津遺跡（田中医院地区）・溝S D 0 2 十層断面図	15
図13. 東木津遺跡（田中医院地区）・溝S D 0 2 十層断面図	15
図14. 荒木津遺跡（田中医院地区）・石製品、土製品実測図	17
図15. 瑞穂町遺跡・位置図	19
図16. 塙能町遺跡（大和ハウス工業地区）・調査区位置図	20
図17. 瑞穂町遺跡と関連遺跡地図	22

図18. 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・全体図	23
図19. 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・第5トレンチ遺構図	24
図20. 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・遺物実測図	25
図21. 萩木津遺跡・位置図	27
図22. 東木津道路（島宇地区）・調査区位置図	28
図23. 萩木津遺跡（島宇地区）・概観図	31
図24. 越中国府間連遺跡・位置図	33
図25. 越中国府間連遺跡（奥村地区）・調査区位置図	34
図26. 越中国府間連遺跡（奥村地区）・概観図	36
図27. 越中国府間連遺跡（奥村地区）・調査区概観図	39
図28. 下佐野遺跡・位置図	41
図29. 下佐野遺跡・黒越地区及び荒木地区・調査区位置図	42
図30. 下佐野遺跡・黒越地区及び荒木地区・調査区概観図	44

## 遺物実測図

図面101. 東木津遺跡（田中医院地区） 須恵器・杯	
図面102. 東木津遺跡（田中医院地区） 須恵器・上部器	
図面103. 東木津遺跡（島宇地区） 須恵器・蓋、軋用侃	
図面104. 東木津遺跡（島宇地区） 須恵器・杯	
図面105. 東木津遺跡（島宇地区） 須恵器・杯	
図面106. 東木津遺跡（島宇地区） 須恵器・杯、壺	
図面107. 東木津遺跡（島宇地区） 土師器・杯、壺、皿 内黒土器 墨青土器	
図面108. 東木津遺跡（島宇地区） 土師器・蓋	
図面109. 東木津遺跡（島宇地区） 土師器・蓋、钵	
図面110. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 軋用侃、須恵器・上部器、灯明皿	
図面111. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 須恵器・土師器、瓦塔、珠彌、瓦器	
図面112. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図面113. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図面114. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図面115. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図面116. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 半瓦	
図面117. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 平瓦	
図面118. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 半瓦	
図面119. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 平瓦	

## 遺構写真

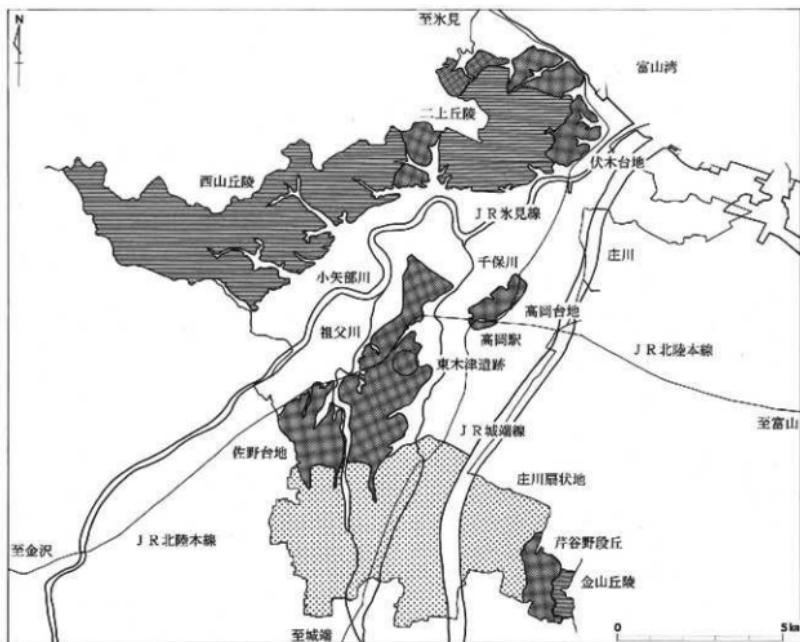
図版101. 東木津遺跡（田中医院地区） 造景・全景	
図版102. 東木津遺跡（田中医院地区） 全景	
図版103. 東木津遺跡（田中医院地区） 中央拡張区全景	
図版104. 東木津遺跡（田中医院地区） 亂路址S F 0 1 全景	
図版105. 東木津遺跡（田中医院地区） 漢 S D 0 8 サブトレンチ完掘状態	
図版106. 東木津遺跡（田中医院地区） 遺物出土状態	
図版107. 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区） 調査区全景他	
図版108. 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区） 第5トレンチ全景	
図版109. 東木津遺跡（島宇地区） 各トレンチ全景	
図版110. 東木津遺跡（島宇地区） 各トレンチ全貌	
図版111. 東木津遺跡（島宇地区） トレンチ全景他	
図版112. 越中国府間連遺跡（奥村地区） トレンチ全景等	
図版113. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 各遺構確認等	
図版114. 下佐野遺跡（黒越地区及び荒木地区） 各トレンチ全景	

## 遺物写真

図版201. 東木津遺跡（山中医院地区） 須恵器・上部器	
図版202. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図版203. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図版204. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 丸瓦	
図版205. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 半瓦	
図版206. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 平瓦	
図版207. 越中国府間連遺跡（奥村地区） 平瓦、瓦塔	

## 1. 東木津遺跡

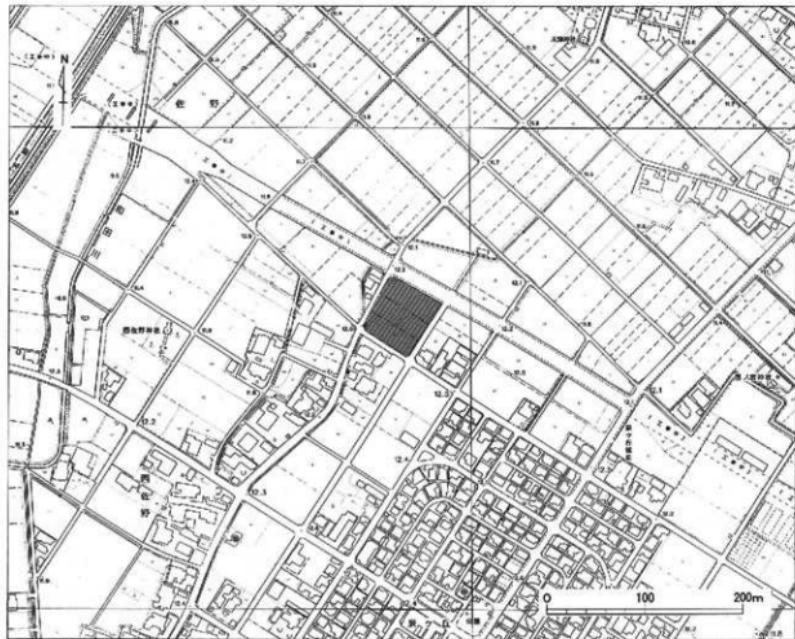
### — 田中医院地区の調査 —



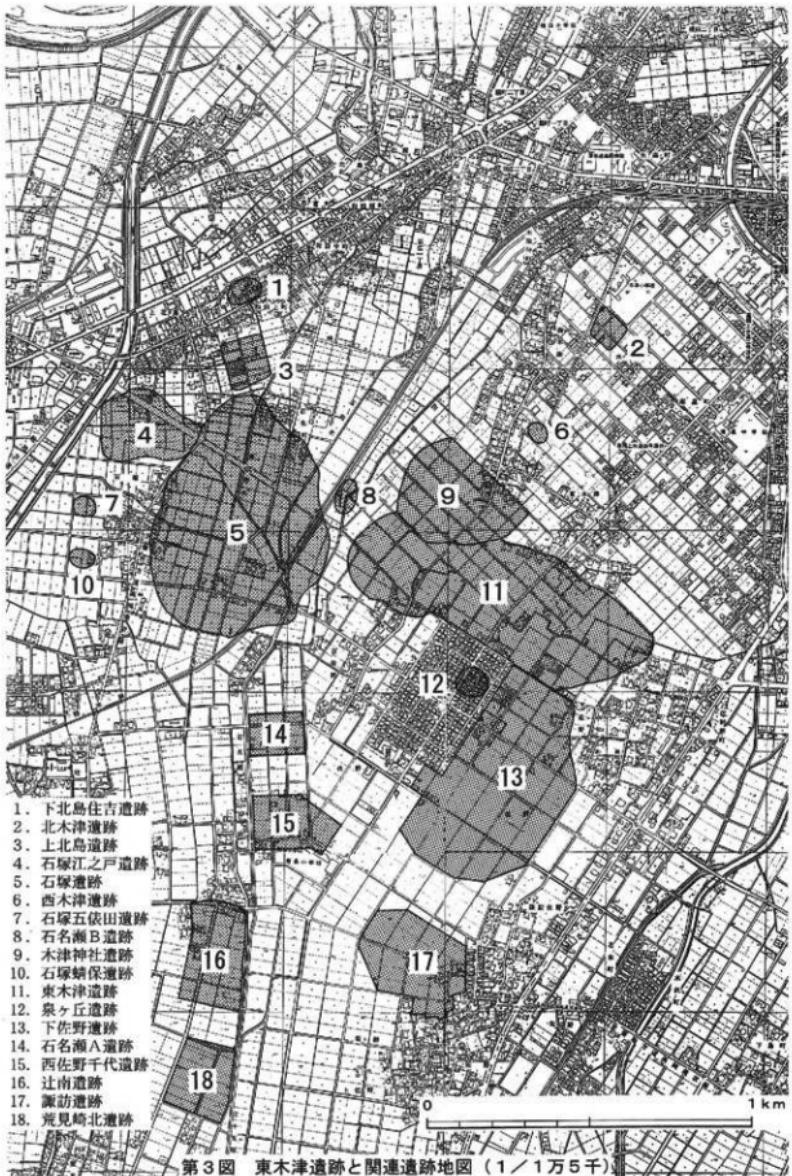
第1図 東木津遺跡・位置図 (1/15万)

## 遺跡概観

「東木津遺跡」は、高岡市域の南西郊、泉ヶ丘団地の北側に位置する。遺跡の東西にはそれぞれ国道156号線とJR北陸本線が走り、遺跡の中央では都市計画道路下伏間江福田線が東西に横断する。東側には千保川が北流し、西側には和田川が北流する。これらに囲まれた標高11～12mを計る庄川扇状地の末端部、佐野台地上に立地している。台地縁辺部の微高地上には数々の遺跡が分布している。当遺跡の北西側には木津神社遺跡があり、北側には西木津遺跡、北木津遺跡が位置している。奈良平安時代から近世にかけて営まれた遺跡群である。西側には和田川を挟んで石塚遺跡が位置する。弥生時代中期を代表する遺跡として知られる。南側に隣接して泉ヶ丘遺跡や下佐野遺跡がある。绳文時代晚期に始まり弥生時代後期から中世にかけて営まれた遺跡である。これらの遺跡範囲は明確ではなく、時代によっては一つの遺跡として把握する見方も考えられる。さらに南側には奈良平安時代を中心とする諏訪遺跡がある。南西側には石名瀬遺跡、西佐野千代遺跡があり、主要な時期は弥生時代から平安時代である。



第2図 東木津遺跡（田中医院地区）・位置図（1／5,000）



第3図 東木津遺跡と関連遺跡地図 (1/1万5千)

当遺跡では昭和61年度から当市教育委員会により発掘調査が実施され、現在まで数々の調査が行われている。平成11年度には都市計画道路建設に伴い大規模な発掘調査が実施され、掘立柱建物址を含む奈良・平安時代の遺構や遺物が多数確認された。この調査では、検出遺構では掘立柱建物址等に計画的な配置が見られる。出土遺物は8世紀後半から9世紀前半に集中しており、遺跡の主要な時期と考えられる。土器類の構成では食膳具の割合が非常に高い。木簡等の遺物からは文字の使用が頻繁になされたと思われる。また、瓦塔や灯明皿が出土しており、宗教的な施設の存在する可能性がある。当遺跡は古代には射水郡域に含まれ、砺波郡に接する地域と考えられる。遺跡の性格として当時の律令政治や荘園開発との関連が窺われる。この時期の中核的な集落の一つと考えられる。

この他、遺跡内の調査により奈良時代～平安時代前期頃の遺構や遺物を中心に確認されており、古墳時代の遺物も見られる。古墳時代～中世に至る大規模な複合遺跡とされる。遺跡の範囲は南北350m、東西990mを計る。

#### 調査に至る経緯

平成14年2月に高岡市農業委員会からの照会により、当遺跡における農地転用と病院建設計画を知ることとなつた。このため、施主の田中農也氏との協議、承諾を得て、同年5月より試掘調査を実施するに至つた。調査地区は木津神社の南西側にあたり、泉ヶ丘園地や西佐野集落の北側に位置する。遺跡の中央部南西側にあたる。

#### 調査経過

発掘調査は平成14年5月13日から同年7月5日まで実施した。当初、試掘坑（トレーナー）を6箇所（第1～6トレーナー）設定した。各トレーナーはバックホーにより表土を除去し、調査地区内に積み上げた。この際、須恵器、上器部など多数の遺物が出土し、また各トレーナーからも多数の遺構を検出した。そこで遺構、遺物の集中箇所を中心に、調査地区を拡張し遺構の範囲確認に努めた。表土除去後、遺構の検出、確認、記録という一連の作業を行つた。今回は試掘調査のため、必要箇所を除いて遺構の掘下げは行っていない。調査対象面積は3,766m<sup>2</sup>、発掘調査面積は740m<sup>2</sup>である。

#### 基本層序

平均20cm前後の表土（耕作土）の下に、黄褐色砂質土からなる地山土（基盤層）を確認した。調査地区南側では表土下に、厚さ5cm前後で黒褐色粘質土からなる遺物包含層が堆積している。

今回の調査地区内では、遺構覆土は暗褐色土を主体としている。遺構の中にはこの他にも黑色土からなるものが見られる。切り合い関係のわかるものは限られるが、一部に黑色土が暗褐色土を切っている遺構が見られるため、黑色土からなる遺構が新しい段階のものと思われる。今回は試掘調査のため、検出面での確認にとどまることから明確にこれらの時期差を認めるることはできなかつた。

調査地区西側では、表土の下に砂礫からなる上層を各トレーナーにおいて検出し、その広がりを確認した。北側ではさらに調査地区外へ広がる。南側では一旦途切れるものの、調査地区周辺ではこの土層が広範囲に分布することである。検出面での確認では、この土層からは遺物の出土はなかった。一部を掘下げたところ、純粹に礫や砂利により構成されていること、黄褐色砂質土の下層へ落ち込むことを確認したことから、ここでは基盤層と考えておきたい。なお、遺構検査面の状態では、調査地区内は区画整理の際に削平を受けているものと思われる。

#### 検出遺構

検出遺構は次の通りである。

柵址 1 条 (S A 01)

道路址 1 箇所 (S F 01)

土坑 22 基 (S K 01 ~ 22)

溝状遺構 8 条 (S D 01 ~ 08)

鉢状遺構 1 箇所 (S X 01)

凹地 1 箇所 (S X 02)

この他に、ピットを多数検出している。

#### 出土遺物

出土遺物は次の通りである。

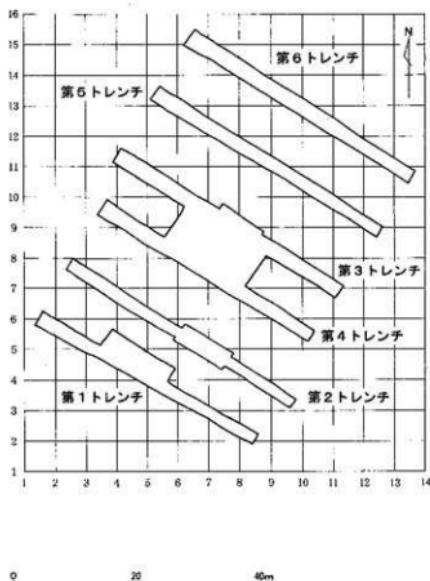
土器・陶磁器類：須恵器、土師器、越中漬戸

石製品：砥石

土製品：土鉢

#### グリッド

調査地区のグリッドは、世界測地系の平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $137^{\circ} 10' 00''$ ）に合わせた。東西をX軸とし、南北をY軸とした。グリッドの左下隅の数値がそのグリッドを表す。X = 1、Y = 1 の地点は、原点より、西へ 15.875 km、北へ 81.115 km へ向かった位置である。一辺 5 m 四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第4図 東木津遺跡（田中医院地区）  
全体概略図 (1/800)

# 検出遺構

## 1. 構造

### 構造 S A 01

調査地区第3トレンチの中央部（7・8・9）区で検出された。西北西から東南東方向へ延びる構造である。規模は2間以上である。柱間寸法は1.8mの等間隔を有する。東側は第3トレンチ外へ延びるものと思われる。方位は座標北に対し西に87度偏っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は一辺が0.4～0.75mを計る。周囲に同様の覆土を持つ土坑を複数検出し、掘立柱建物址の可能性も考えたが、断割り調査は行っておらず、掘り方が不揃いのため今回は構造とした。

## 2. 道路址

### 道路址 S F 01

2本の平行して走る溝を道路の側溝として道路址とした。調査地区的東側、第2トレンチ南東端部、第3トレンチの南東部、第4トレンチの南東部、第5トレンチ中央部で検出された。S D 07とS D 08を伴いほぼ南北方向に延びる。規模は確認した範囲では長さ39.4mを計る。溝の心々間での幅は2.5mを計る。側溝間の遺構検出面で、整地層や硬化面は確認できなかった。南東側は調査地区外へ延びる。北側は調査地区中央北側で不明確になる。

## 3. 土坑

### 土坑 S K 01

調査地区第6トレンチの北西端部（6・14・15）区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸2.6m以上、短軸2.4m以上を計る。北側で調査地区外へ広がる。出土遺物は須恵器、土師器である。

### 土坑 S K 02

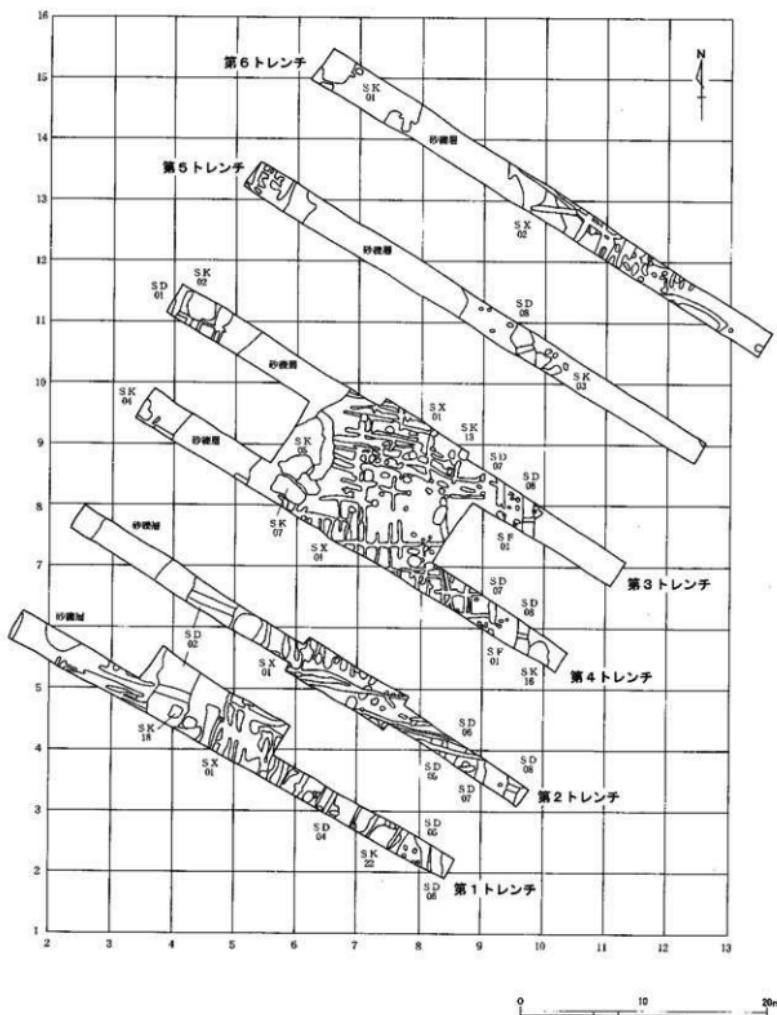
調査地区第3トレンチの北西端部（4・11）区で検出された。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.3m以上、短軸2.1m以上を計る。遺構上面をS X 01に切られる。北側で第3トレンチ外へ広がる。出土遺物は須恵器、土師器である。

### 土坑 S K 03

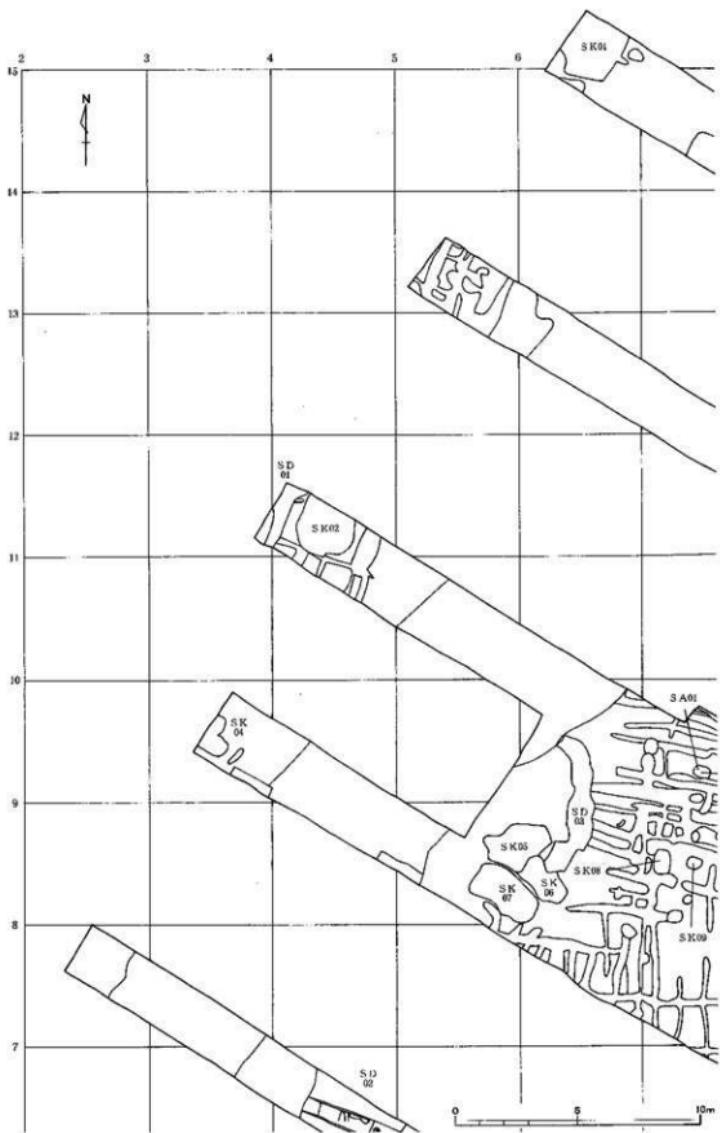
調査地区第5トレンチの中央部（9・10・10）区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.2m以上、短軸0.6m以上を計る。南西側で第5トレンチ外へ広がる。西側でS D 08に接する。

### 土坑 S K 04

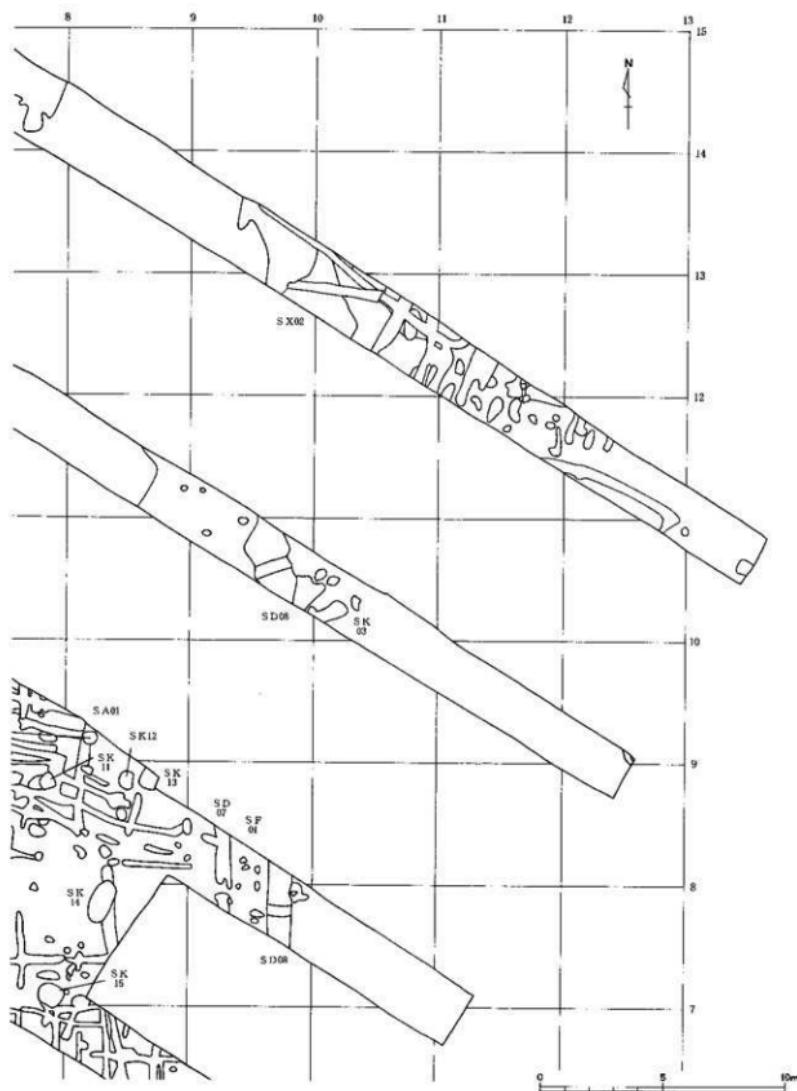
調査地区第4トレンチの北西端部（3・9）区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.6m以上、短軸1.1m以上を計る。北西側は調査地区外へ広がる。出土遺物は土師器である。



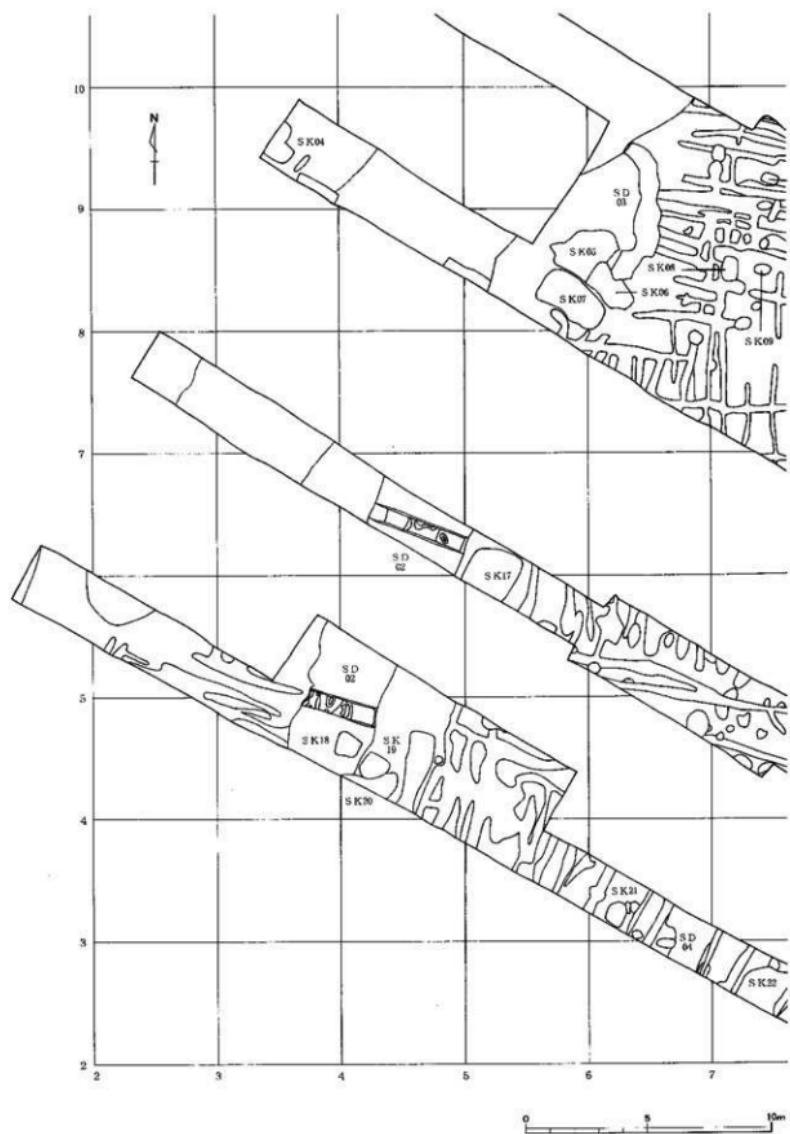
第5図 東木津遺跡（田中医院地区）・全体図（1／400）



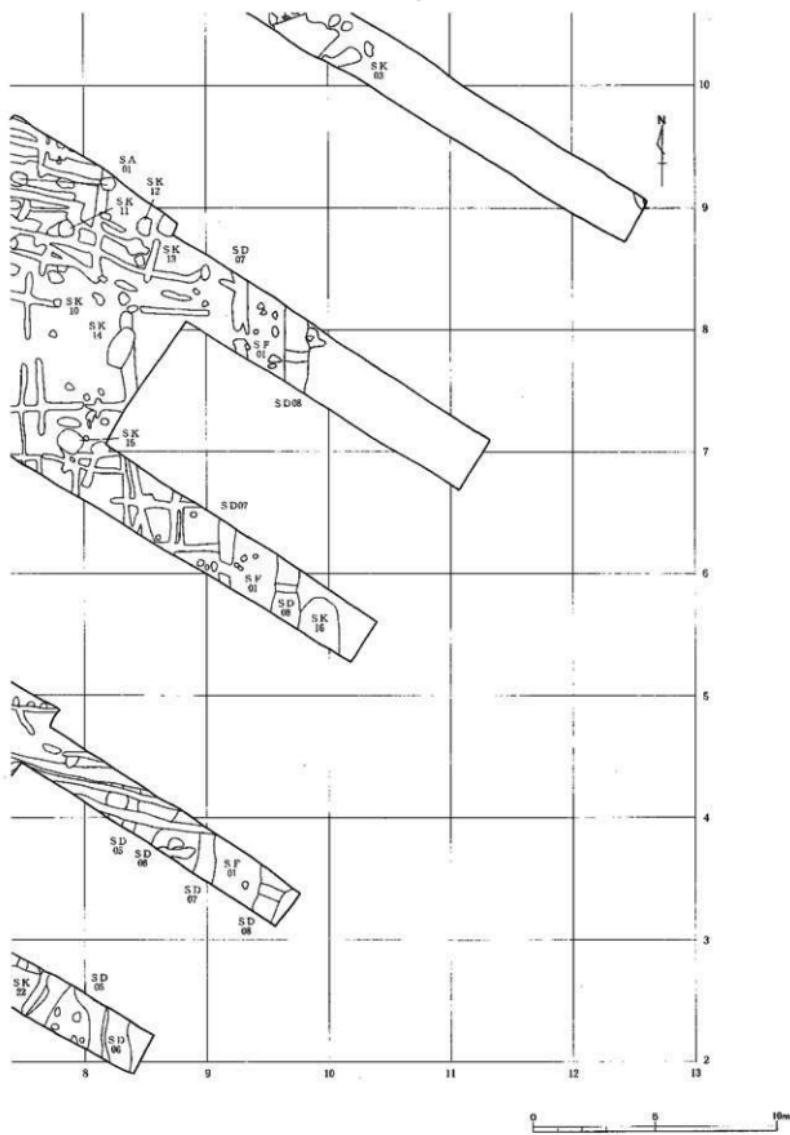
第6図 東木津遺跡（田中医院地区）・北西部遺構図（1/200）



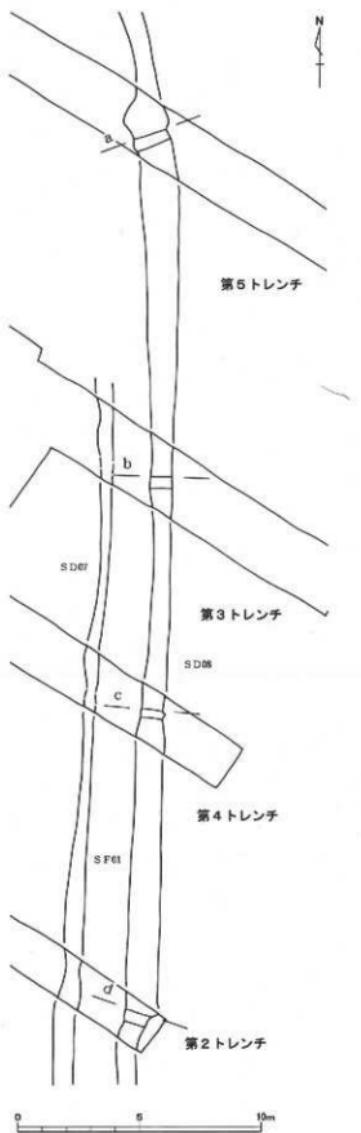
第7図 東木津遺跡（田中医院地区）・北東部遺構図（1／200）



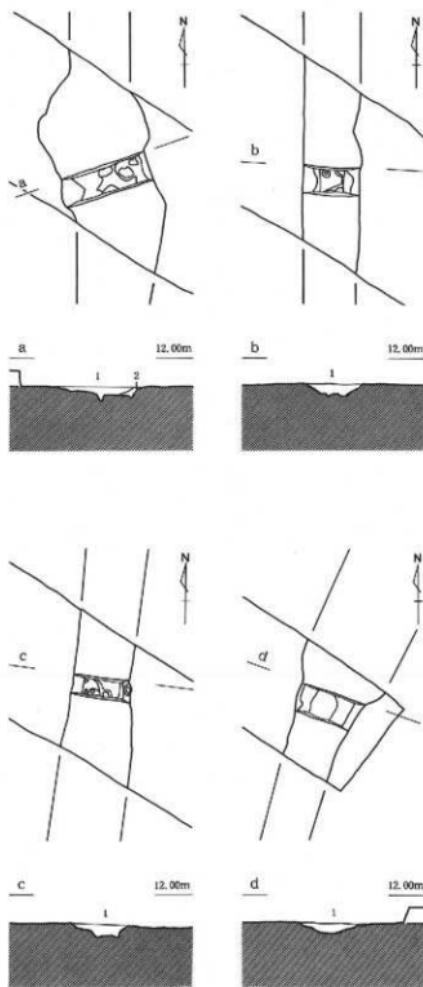
第8図 東木津遺跡(田中医院地区)・南西部遺構図(1/200)



第9図 東木津遺跡（田中医院地区）・南東部造構図（1／200）



第10図 東木津遺跡（田中医院地区）  
道路址 S-F01 実測図 (1 / 200)



第11図 東木津遺跡（田中医院地区）  
溝 S-D06 実測図 (1 / 80)

### **土坑SK 05**

調査地区中央拡張区の北西部（5・6・8）区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸2.7m、短軸1.6mを計る。南東側でSK 06を切っている。出土遺物は須恵器、土師器である。

### **土坑SK 06**

調査地区中央拡張区の北西部（5・6・8）区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸1.2mを計る。北側でSK 05、SD 03に切られる。出土遺物は須恵器、土師器である。

### **土坑SK 07**

調査地区第4トレンチの北西部（5・6・8）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸2.9m、短軸1.5mを計る。出土遺物は須恵器、土師器である。

### **土坑SK 08**

調査地区中央拡張区の中央部（7・8）区で検出された。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.7mを計る。遺構上面をSX 01に切られる。構造、掘立柱建物址の掘り方とも考えられるが、今回は土坑とした。出土遺物は須恵器、土師器である。

### **土坑SK 09**

調査地区中央拡張区の中央部（7・8）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸0.6m、短軸0.4mを計る。構造、掘立柱建物址の掘り方とも考えられるが、今回は土坑とした。

### **土坑SK 10**

調査地区中央拡張区の中央部（7・8）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸0.7m、短軸0.5mを計る。構造、掘立柱建物址の掘り方とも考えられるが、今回は土坑とした。

### **土坑SK 11**

調査地区第3トレンチの中央部（7・8）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸0.7m、短軸0.6mを計る。遺構上面をSX 01に切られる。遺構復上は焼土を主体とする。構造、掘立柱建物址の掘り方とも考えられるが、今回は土坑とした。

### **土坑SK 12**

調査地区第3トレンチの中央部（8・8）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸0.7m、短軸0.5mを計る。構造、掘立柱建物址の掘り方とも考えられるが、今回は土坑とした。

### **土坑SK 13**

調査地区第3トレンチの中央部（8・8）区で検出された。平面形は長方形を呈し、規模は長軸0.8m以上、短軸0.7m以上を計る。北東側は第3トレンチ外に広がる。出土遺物は須恵器である。

### **土坑SK 14**

調査地区中央拡張区の南東部（8・7・8）区で検出された。平面形は長梢円形を呈し、規模は長軸1.6m、短軸0.9mを計る。遺構上面をSX 01に切られる。出土遺物は須恵器、土師器、砥石である。図示した遺物は、図面101-1010、図面102-1028、第14図-4001である。

### **土坑SK 15**

調査地区第4トレンチの中央部（7・7）区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.9mを計る。出土遺物は須恵器、土師器である。

### **土坑SK 16**

調査地区第4トレンチの南東端部（9・10・5）区で検出された。平面形は不定梢円形を呈し、規模は長

軸1.9m以上、短軸1.6m以上を計る。南側は第4トレンチ外に広がる。西側をSD 08に切られる。

#### 土坑SK 17

調査地区第2トレンチの中央部(4・5, 5・6)区で検出された。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.0m以上、短軸1.9mを計る。南西側は第2トレンチ外に広がる。出土遺物は須恵器、土師器である。図示した遺物は、図面101-1003、図面102-1025である。

#### 土坑SK 18

調査地区第1トレンチの中央部(3・4, 4)区で検出された。平面形は方形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.9mを計る。SD 02の南東側を切っている。

#### 土坑SK 19

調査地区第1トレンチの中央部(4, 4)区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸1.0mを計る。南側でSK 20を切っている。出土遺物は須恵器である。

#### 土坑SK 20

調査地区第1トレンチの中央部(4, 4)区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.9m以上、短軸1.0m以上を計る。北側をSK 19に切られる。南西側は調査地区外に広がる。

#### 土坑SK 21

調査地区第1トレンチの南東部(6, 3)区で検出された。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.8mを計る。遺構覆土は焼土からなる。出土遺物は須恵器、土師器である。

#### 土坑SK 22

調査地区第1トレンチの南東部(7, 2)区で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸2.3m以上、短軸1.9m以上を計る。遺構上面をSX 01に切られる。南西側は調査地区外に広がる。

### 4. 溝状遺構

#### 溝SD 01

調査地区第3トレンチの北西端部で検出された。直線的に北北東～南南西方向に走る。規模は幅0.35～1m、長さ2.7m以上を計る。北側、南側で調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器、土師器である。

#### 溝SD 02

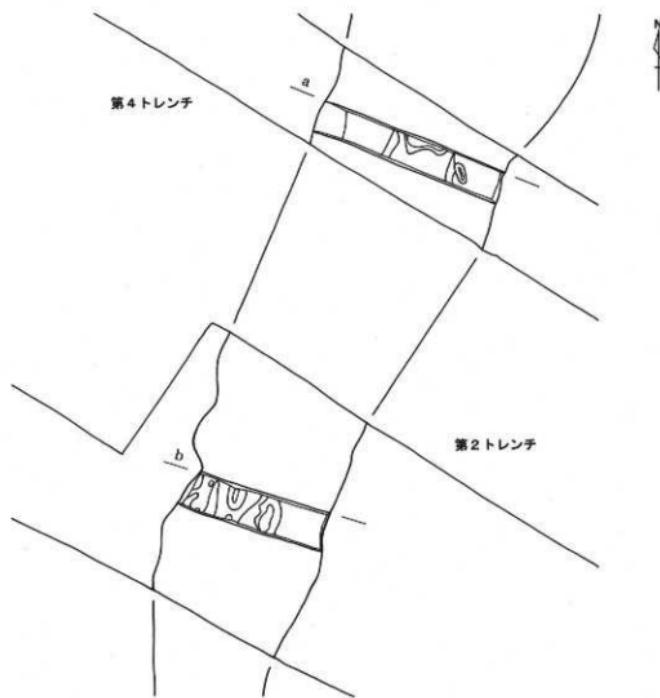
調査地区第1トレンチと第2トレンチの北西部で検出された。検出状態と規模から1本の溝と判断した。北東～南西方向に走る。規模は幅2.9～4.1m、深さ51cm、長さ12m以上を計る。南東側でSK 18に切られる。北側は第2トレンチ外へ延び、南側は調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器、土師器である。図示した遺物は、図面101-1006・1011・1015、図面102-1027・2001である。

#### 溝SD 03

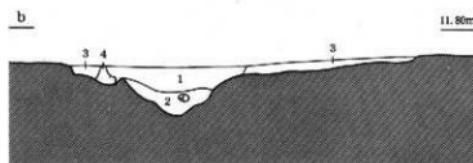
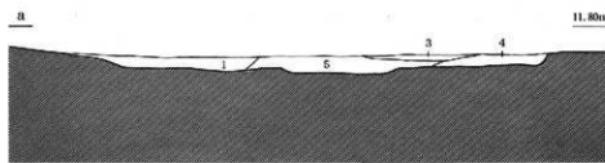
調査地区中央拡張区の北西部で検出された。やや弧を描きながら北から南西方向に走る。規模は幅0.6～1.2m、長さ5.5m以上に亘り検出した。北側は砂砾層で途切れ、南側でSK 06を切っている。遺構上面をSX 01に切られる。出土遺物は須恵器、土師器である。

#### 溝SD 04

調査地区第1トレンチの南東部で検出された。北東から南西方向に走る。規模は幅1.2～2.1m、長さ2.2



第12図 東木津遺跡(田中医院地区)・溝SD 02実測図(1/100)



- 1 暗茶褐色粘質土 炭化粒、小礫、遺物含む。
- 2 黒褐色粘質土 地山粒状に混在。
- 3 暗褐色砂質土 炭化粒含む。
- 4 地山ブロック 黒褐色土わずかに含む。
- 5 暗褐色砂質土と地山土の混土層

第13図 東木津遺跡(田中医院地区)・溝SD 02土層断面図(1/40)



m以上を計る。北東側は第1トレンチ外へ延び、南西側は調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器である。

#### 溝 S D 05

調査地区第1トレンチの南東端部、第2トレンチの南東部で検出された。各トレンチの検出状態と規模から1本の溝とした。ほぼ直線的に北北東から南南西方向に走る。規模は幅0.55～1m、長さ11.4m以上を計る。第2トレンチで遺構上面をS X 01に切られる。北側は第2トレンチ外へ、南側は調査地区外へ延びる。

#### 溝 S D 06

調査地区第1トレンチの南東端部、第2トレンチの南東部で検出された。各トレンチの検出状態と規模から1本の溝とした。ほぼ直線的に北北東から南南西方向に走る。規模は幅0.6～1.7m、長さ11.7m以上を計る。第2トレンチで遺構上面をS X 01に切られる。北側は第2トレンチ外へ延び、南側は調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器、土師器である。図示した遺物は、図面102～2002である。

#### 溝 S D 07

調査地区第2トレンチの南東端部、第3トレンチの南東部、第4トレンチの南東部で検出された。各トレンチの検出状態と規模から1本の溝とした。ほぼ直線的に北北東から南南西方向に走る。規模は幅0.5～0.9m、長さ25.1m以上を計る。SD 08と平行に走るため道路址S F 01として機能していたと考えられる。北側は第3トレンチ外へ延び、南側は調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器、土師器である。図示した遺物は、図面101・1001・1014・1017・1019である。

#### 溝 S D 08

調査地区第2トレンチの南東端部、第3トレンチの南東部、第4トレンチの南東部、第5トレンチの中央部で検出された。各トレンチの検出状態と規模から1本の溝とした。ほぼ直線的に南北方向に走る。規模は幅0.9～1.8m、長さ39.4m以上に亘り検出された。深さは19cmを計る。SD 07と平行に走るため道路址S F 01として機能していたと考えられる。北側は第5トレンチ外へ延び、南側は調査地区外へ延びる。出土遺物は須恵器、土師器である。

## 5. 敷状遺構

### 敷状遺構 S X 01

調査地区的全域で検出された。幅30～50cmの小規模な溝が一部折り重なるように交差して走る。大きく分けて北西から南東方向、北東から南西方向に走るものと、東西方向、南北方向に走るものがある。調査地区中央部～南側では他の遺構上面を切っている。今回はこれらの溝を敷状遺構として報告した。

## 6. 四地

### 四地 S X 02

調査地区第6トレンチ中央部で検出された。北側は調査地区外へ、南側は第6トレンチ外へ延びる。遺構上面をS X 01に切られる。SD 08の延長部分とも考えられるが、断面を観察したところ、溝状の掘込みが見られないことから、今回は四地とした。

# 出土遺物

## 1. 土器類

須恵器 (図面 101 ~ 1001 ~ 1020、図面 102 ~ 1021 ~ 1032)

1001 ~ 1013 は高台が付かない杯である。1014 は杯の口縁部である。1015 ~ 1020 は高台が付く杯である。1021 ~ 1028 は杯蓋のつまみ・天井部・口縁部である。1024 は天井部内面にヘラ記号が付く。1029 は壺の口縁部・胴上部である。1030 は双耳瓶の肩部である。1031 は横瓶の口縁部である。1032 は壺の口縁部である。

土師器 (図面 102 ~ 2001 ~ 2005)

2001 は椀である。2002 は小型の壺である。2003 ~ 2005 は壺の口縁・胴上部である。口縁端部をつまみ上げを施すものである。

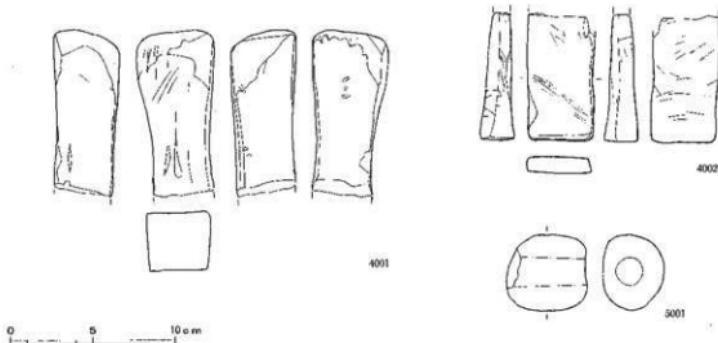
## 2. その他の遺物

石製品

砥石 第 14 図 - 4001・4002。4001 は砂岩製である。4002 は安山岩製である。

土製品

土錐 第 14 図 - 5001。土師質、柱状の土錐である。



第 14 図 東木津遺跡 (田中医院地区)・土製品、石製品実測図 (1/3)

## ま と め

東木津遺跡では、南東側で実施した都市計画道路築造に伴う調査をはじめ、その他小規模な調査により、奈良平安時代を主体とした遺跡であることが確認されている。遺跡南東側一帯を中心に周辺の状況の把握が進展しつつある。今回の調査では、遺跡西側においても奈良平安時代の遺構、遺物を確認し、遺跡の主要となる年代と集落遺跡としての内容の一端が把握できた。

検出された遺構の大半は奈良平安時代に属すると思われる。構造と道路量について、それぞれ東西方向と南北方向とを意識してつくられた可能性があり、配置に規格性を窺うことができる。道路址については、部分的な検出にとどまったため全体像は判然とはしないが、小規模なものであり、集落内の通路と思われる。今後の調査に検討が必要である。遺構の中には調査地区外へ拡がるものもあることから、調査地区周辺にもこの時期の遺構・遺物が分布している可能性がある。

出土遺物は奈良時代から平安時代前期頃のものが大半を占めている。土師器の一部には、赤彩や黒色処理を施すものもみられる。占墳時代や中世の遺物は確認できなかった。

今回の調査地区は東木津遺跡の南西部にあたる。この周辺が遺跡範囲と考えられたが、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されたことで遺跡範囲がさらに南側へ広がる可能性が高まった。

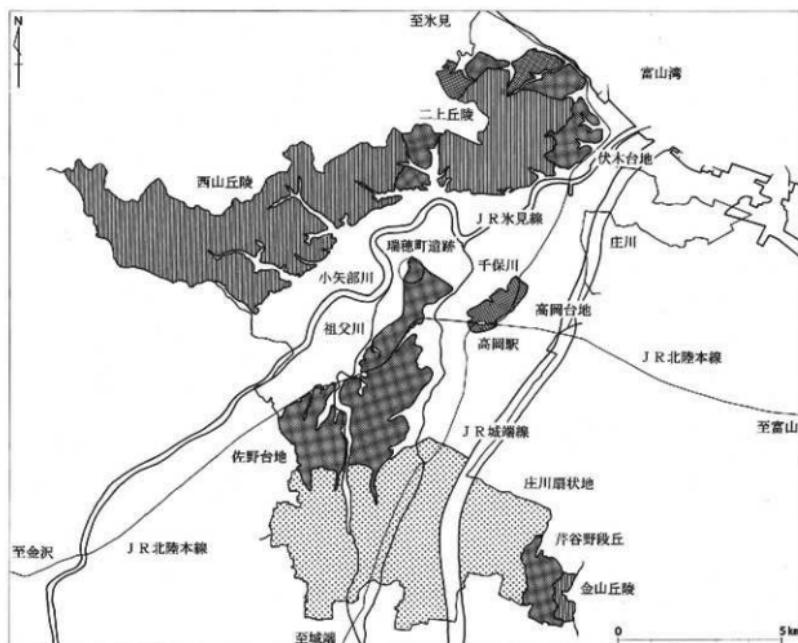
(荒井)

### 参考文献

- 高岡市教育委員会 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ」 1990
- 高岡市教育委員会 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ」 1992
- 高岡市教育委員会 「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告」 2001

## 2. 瑞穂町遺跡

— 大和ハウス工業地区の調査 —



第15図 瑞穂町遺跡・位置図 (1/15万)

### 遺跡概観

「瑞穂町遺跡」は、高岡市街地の西側に位置する。東側を国道8号線が南西から北東方向に走る。北側を主要地方道高岡水見線が南東から北西方向に走る。東側には千保川が北流し、西側を小矢部川が蛇行しながら南西から北東方向に流れ、北西側の四屋地区で合流する。東側には市街地中心部と高岡城址（古城公園）の位置する洪積台地である高岡台地がある。現在の千保川は、かつての庄川の本流にあたり、近世初頭の加賀藩の工事により固定されるまで流路が定まってなかったとされる。瑞穂町遺跡は、これらの河川により形成された沖積低地中の標高8~9mを計る微高地に位置する。周辺には、式内社速川神社がある。当地を含む射水郡南西部は鎌倉時代末~南北朝時代には同領「西条郷」として知られ、戦国期には西条保が所在した。なお、当遺跡については、平成7年度に当市教育委員会による分布調査の成果をふまえ、標記の遺跡名に変更している。



第16図 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・位置図（1／5,000）

また、その際には、当遺跡の周囲においても遺跡の範囲確認と変更がなされた。沖積低地側では波岡西遺跡が新規に確認された。古墳時代後期から中世の遺跡である。波岡集落のある微高地周辺では、古くから遺物が採集されることが知られており、波岡北遺跡や波岡東遺跡について新たに遺跡範囲の設定がなされた。遺跡の主要な時期は弥生時代から近世である。また、波岡南遺跡については早川遺跡を含む範囲を新たに設定した。これは古代から中世にかけて営まれた遺跡である。そして当の瑞穂町遺跡については、波岡遺跡を含む遺跡の範囲とし、採集遺物により遺跡の主要な時期は弥生時代～近世と訂正された。遺跡の範囲は、南北180 m×東西140 mを計る。

#### 調査に至る経緯

平成14年4月に高岡市農業委員会からの照会で、当遺跡における農地転用と共同住宅建設設計画を知ることになった。このため、地主の増山清作氏と施工の大和ハウス工業株式会社と協議し、両者の承諾を得て、試掘調査を実施するに至った。調査地区は速川神社の南東側にあたり、高岡市立西部中学校や市民プールの南西側に位置する。

#### 調査経過

発掘調査は平成14年4月22日から同年5月2日まで実施した。表土除去はバックホーで行い、調査地区内に積み上げた。当初、試掘坑（トレーニング）を6箇所設定した。調査地区北東側を中心に遺構や遺物を検出した。そこで改めて北東側の2箇所のトレーニングの拡張を行い計5つのトレーニングを設定するなどして、重点的にこの範囲の遺構の確認に努めた。その後は、遺構の検出をはじめ、この確認や記録といった一連の作業を順次行った。今回は試掘調査のため遺構については検出面での確認にとどめ、必要に応じて部分的に掘下げ、遺構の規模と内容の確認を行った。また、今回は公共座標は設定せず、任意の測量とした。平板による実測図は調査地区全体図として第18図に示し、第5トレーニング遺構図として第19図に示した。調査対象面積は1,846.8 m<sup>2</sup>で、調査面積は210 m<sup>2</sup>である。

#### 基本層序

基本層序は、調査地区中央部から北側は、厚さ20 cmの表土（耕作土）の下に、上層から厚さ20 cm前後の灰褐色粘質土層、厚さ20 cmの暗灰色粘質土層の順に堆積し、黄褐色砂質土乃至青灰色砂質土からなる地山上が現れる。調査地区南側は厚さ20 cmの表土（耕作土）の下に、厚さ5 cm前後の淡灰色粘質土層（整地層）があり、その下に地山土が現れる。地山土は北側へ向かって緩やかに落ち込んでおり、北側の方が遺構、遺物の依存状態は良好であった。南側は地山面まで区画整理の跡の削平が及んでいると思われる。

#### 検出遺構

検出した遺構は以下の通りである。

土坑2基（SK 01～02）

溝1条（SD 01）

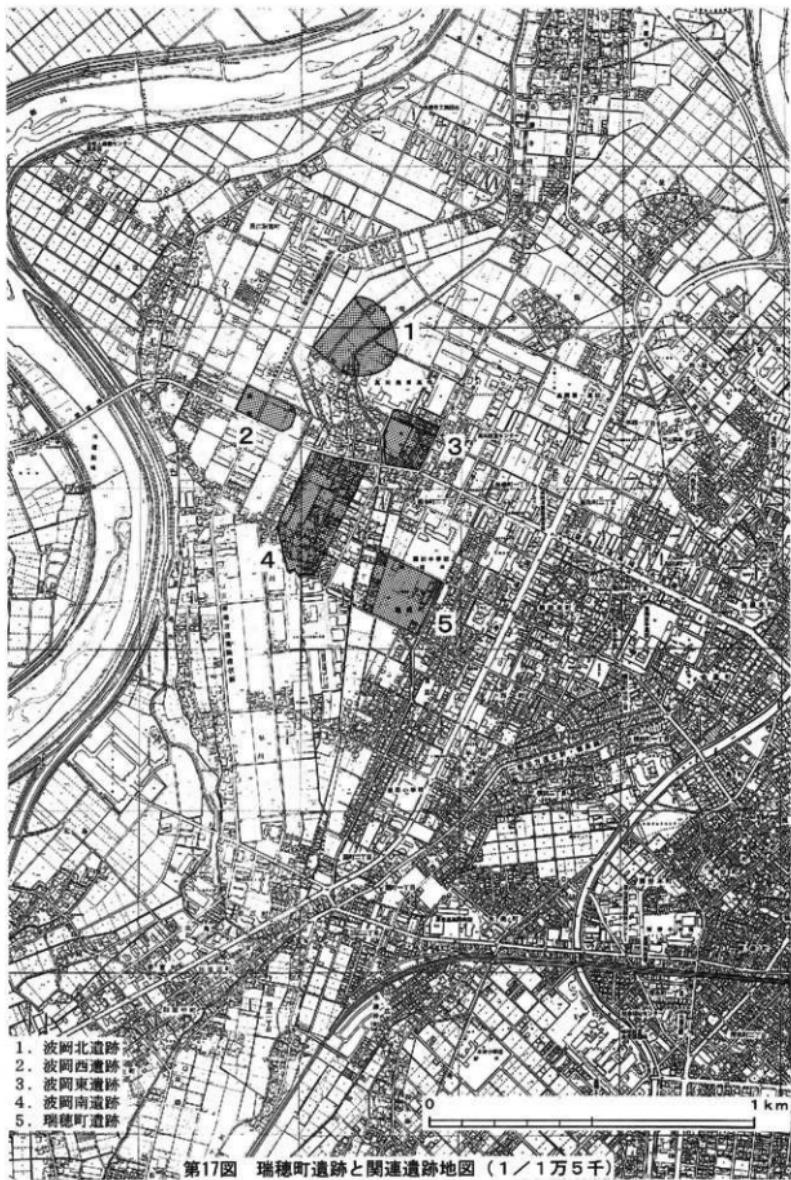
円柱1箇所（SX 01）

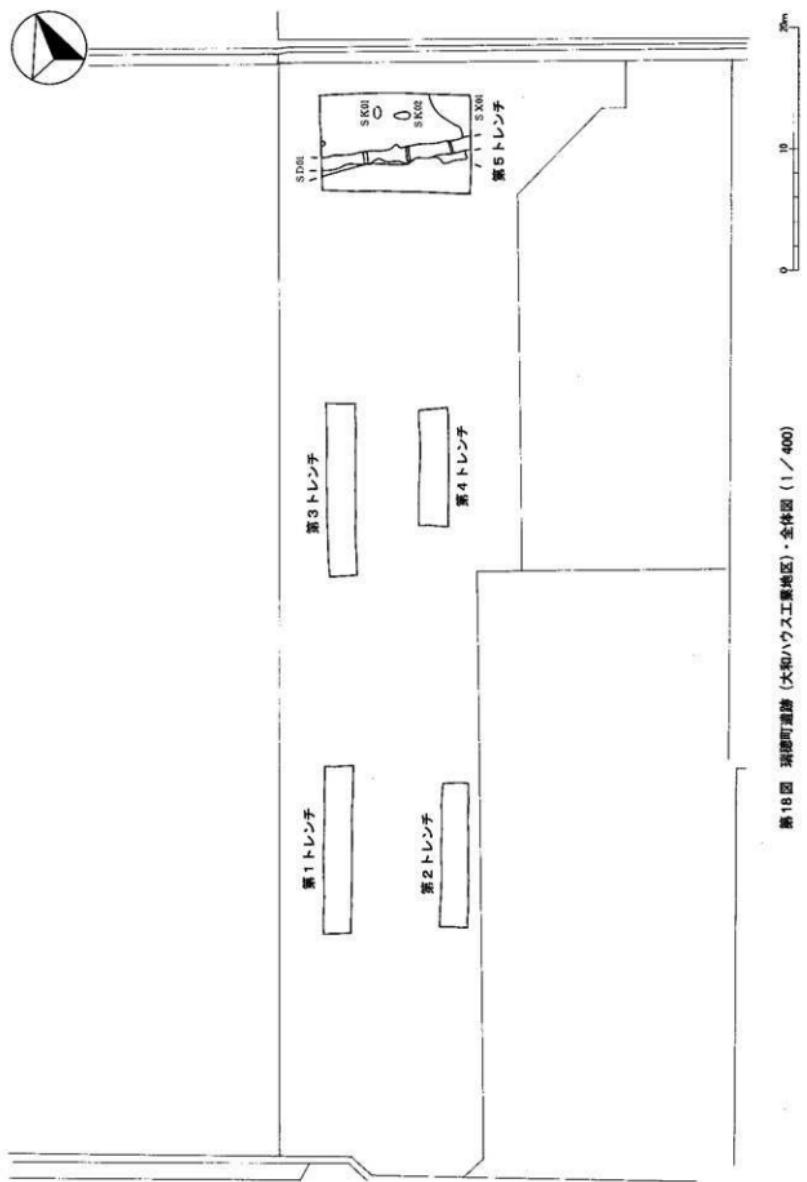
なお、調査地区北側の第5トレーニング南側より溝状の落ち込みを1箇所検出した。一部を掘下げて十層を確認したところ、復上の状態から考慮して近世以降の溝と判断した。また、第5トレーニングからは1基のピット（SP 01）を検出した。

#### 出土遺物

出土遺物は以下の通りである。

上器・陶磁器類；須恵器、土師器、珠洲、近世陶磁器





第16図 環境町埋蔵 (大和ハウス工業地区)・全体図 (1/400)

## 検出遺構

### 土坑 SK 01

調査地区北東部、第5トレンチの中央部北側で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸0.82m、短軸0.35mを計る。西側は暗渠に切られる。出土遺物は土師器である。

### 土坑 SK 02

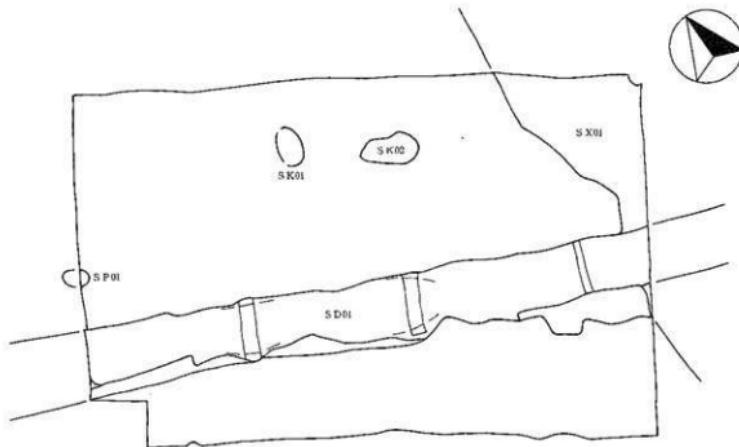
調査地区北東部、第5トレンチの中央部北側で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸1.10m、短軸0.62mを計る。

### 溝 SD 01

調査地区北東部、第5トレンチの南側で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝である。規模は幅0.88~1.36m、深さ17cm、長さ11.5m以上を計る。西側、東側は調査地区外へ延びる。東側はSX 01を切っている。南側は近世以降と思われる溝に切られる。出土遺物は須恵器、土師器である。図示した遺物は図面20-1034である。

### 凹地 SX 01

調査地区北東部、第5トレンチの北東端部で検出した。規模は長軸4.8m以上、短軸2.8m以上を計る。北東側は調査地区外へ広がる。南西側はSD 01に切られる。今回は全体を把握していないので凹地とした。出土遺物は土師器である。



第19図 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・第5トレンチ遺構図（1/100）



## 出 土 遺 物

### 土器類

須恵器（第20図-1033～1035）

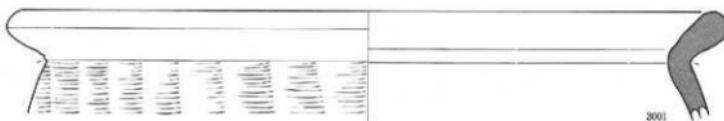
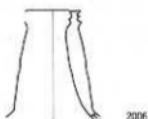
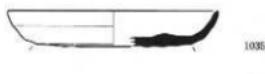
1033は杯Hである。立ち上がりと受部を持つ杯身である。立ち上がりは内傾してたちあがり、受け部は外方へ短く延びる。1034は杯H蓋である。杯Hと組み合う椀形の蓋である。体部より口縁部は外下方に拡がる。1035は皿である。

### 土師器

第20図-2006。高坏の脚部である。

### 珠洲

第20図-3001。甕の口縁部である。



第20図 瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）・遺物実測図（1/3）

5 10 cm

## ま と め

瑞穂町遺跡は、1993年発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』によると波岡遺跡とされていたが、平成7年度に実施した埋蔵文化財分布調査により波岡遺跡を含めて瑞穂町遺跡として総括されている。

今回の調査は当遺跡としては初めての発掘調査となる。試掘調査の性格上、全体の把握には限界があるものの、調査地区北側を中心に遺構、遺物を確認し、遺跡の年代と性格の一端が判明した。検出した遺構は、上坑2基、溝1条、凹地1箇所である。このうち、溝S D 01は、直線的にほぼ東西方向に走ることから、何らかのものを区画する意図をもつ遺構と思われる。出土遺物から時期は飛鳥時代のものと思われる。この他の遺構については、周辺からも同時期の遺物が出土しており、覆土が共通していることから同時期のものと考えている。

また、調査地区内から古墳時代前期、中世の遺物も出土していることから、遺跡内には古墳時代、中世の様相も所在しているものと思われ、今後、調査地区周辺において同時期の遺構、遺物が確認される可能性がある。今回の調査地区は遺跡の南東部にある。遺構は調査地区北側を中心に東西方向へと広がりを見せており、遺跡範囲はさらに東側に広がる可能性がある。

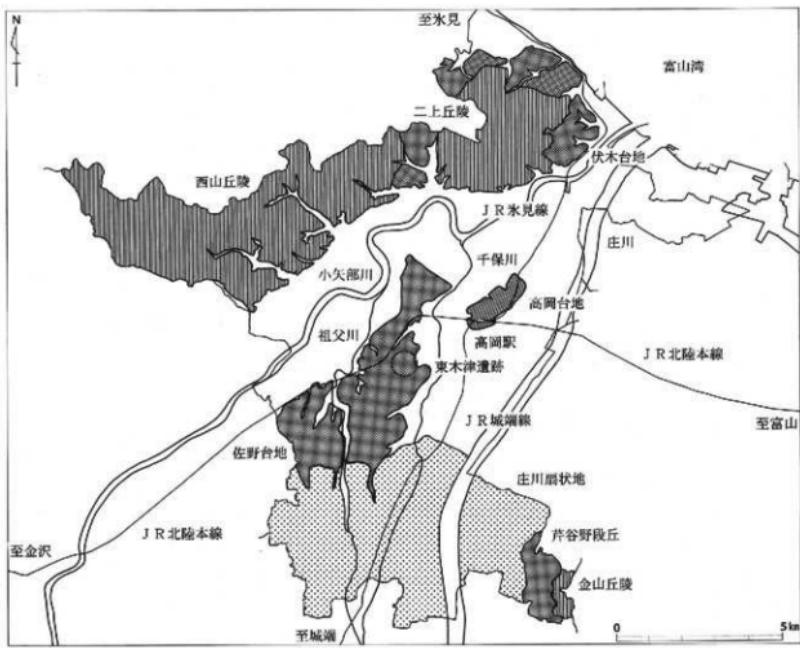
(荒井)

### 参考文献

- 田辺 昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966
- 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告』 1996
- 高岡市教育委員会 『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅷ』 1996
- 高岡市教育委員会 『江道横穴墓群調査報告』 1998

### 3. 東木津遺跡

#### — 島宇地区の調査 —



第21図 東木津遺跡・位置図 (1/15万)

## 遺跡概観

「東木津遺跡」は、高岡市の佐野台地の北端に位置する遺跡である。これまでに行われた発掘調査の成果によって、当遺跡については8世紀中頃から9世紀前半までとの期間では、官衙的な活動が行われていたことが把握されており、現状では国または郡の出先機関として機能していたとする意見などが提起されている〔高岡市教委2001他〕。

ここで報告する当遺跡の「島宇地区」は、平成11年度に試掘調査を行った同遺跡「セーブオン地区」と隣接するものである。この周辺からは、大型建物を含む十数棟からなる掘立柱建物群をはじめ、円面鏡や軒用鏡といった文具の他、稚子札木箇や、後述する氣賀神宮寺にかかる木簡なども検出されており、概して官衙的な活動が行われていた可能性を問うことができる。

## 調査概要

今回の試掘調査については、高岡市佐野871-1外の地に、島野一郎氏がガソリンスタンドの建設を計画し、平成14年に高岡市教育委員会へと、当該地における埋蔵文化財について問い合わせを行ってきたことに端を発するものである。

しかし、当該地については、既に東木津遺跡の埋蔵文化財包蔵地として周知されていたことから、事前に埋蔵文化財の有無を確認することや、これを保護するための何らかの措置を講じる必要があったため、島氏のご了承のもと、平成14年9月に試掘調査を実施することで合意にいたった次第である。

屋外調査は平成14年9月2日から同月5日までの間に実施した。調査対象面積は3,032m<sup>2</sup>であり、計7本の試掘坑（以下、トレンチと称する。）を要して314.8m<sup>2</sup>の範囲を掘削した。

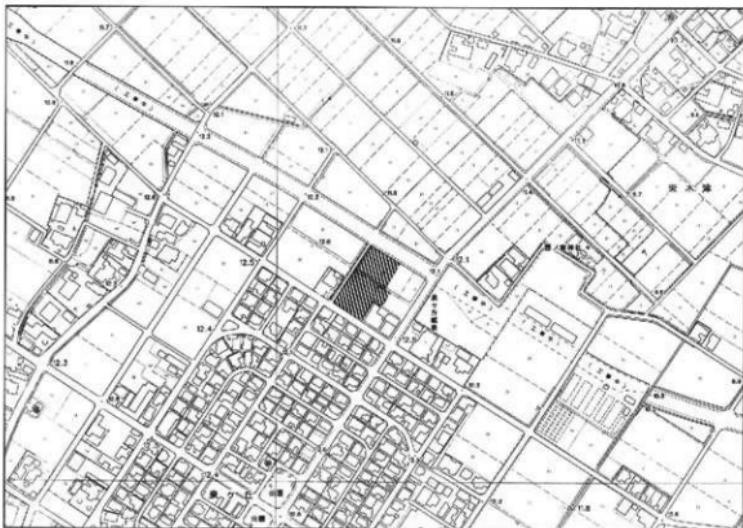


図22. 東木津遺跡（島宇地区）・調査区位置図

## 検出遺構

当調査区からは多数の遺構が検出されている。もっとも、今回の調査では地下の遺構の所在を確認することに力点をおき、遺構の覆土までは掘削をしていないため、将来的に当該地に本調査が行われるようであれば、本邦において図示する遺構の平面形にも、多少の変化が生ずる可能性があることを、あらかじめご了承いただきたい。

### 土坑群

調査区の中央に位置する第3トレントと第4トレントを中心に検出されている。遺構の覆土については、黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) をベースに、拳大から直徑数cm程度の地山ブロックを含んでおり、近隣調査区で検出された掘立柱建物の掘方とも一致する。遺構の平面形は円形または方形を呈し、なかには直線的に數基が並ぶものもあるため、現時点においては横ないし掘立柱建物の一角となる可能性がある。また、後述する溝状遺構などと切り合っている可能性もあるため、その数はさらに増加する可能性がある。

### 溝状遺構群（または畠状遺構）

調査区内に設定した7つのトレントの全てから検出されており、このうちの第5トレントと第6トレントからは、比較的明確に畠状遺構と判断しうるもののが検出されている。遺構の覆土は、黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) をベースに拳大から直徑数cm程度の地山ブロックを含むことを基本とし、上記した土坑群の他、近隣調査区で検出された掘立柱建物の掘方の覆土とも一致している。

## 出土遺物

今回の調査区からは、調査面積が小さい割には比較的多くの遺物が出土した。また、年代的には8世紀中頃から10世紀代までの古代の遺物の他、中世や近世の遺物も出土しているが、数量的には8世紀後半代から9世紀前半代までのものが圧倒的に占めている。

遺物の出土は全トレントからみられたが、調査区の東方（11年度の「セーブオン地区」）にゆくほどに、その出土量は増加する傾向にあった。ただし、当調査区を含む周辺地域については、後世における開拓や開発行為によって相当の深さにまで擾乱が及んでいたため、この地点については遺構検出面よりも上位の土層は表土化しているとみられる。したがって、上記の遺物についても往時の廻没地点を如実にあらわす保証ではないものと思われる。

今回の調査区から出土した古代の遺物については、大多数が杯や碗などといった食膳具で占められる傾向にあり、その比率は現状においても全体の約78%に及び、貯蔵具（約5%）や煮沸具（約17%）を大きく上回っている。すでに先学の研究成果により官衙的な遺跡においては食膳具の占める割合が90%を超える傾向にあることが知られているため〔宇野1991他〕、当調査区における器種構成は、官衙的な遺跡のそれとはやや数値的にも相違があることになろう。しかし、煮炊具については、東木津遺跡において官衙的な様相が窺われなくなる9世紀後半代以降に数量を増していく傾向にあるため、この時期を境とする前後の二相については若干の相違点がある可能性もあり、同遺跡における器種構成をうらなうためには、今後における周辺地区的調査成果を見守っていく必要があるものと思われる。

### 須恵器（図面103～106）

須恵器については、8世紀後半代から10世紀代のものが当調査区から出土している。器種構成としては、杯Aや杯Bなどといった食膳具をはじめ、壺や大甕などの貯蔵具、それに転用硯などが見受けられるが、上述もしたように食膳具の占める割合が圧倒的に多い。

ただし、周辺地区の調査成果を参照するならば、東木津遺跡においては、9世紀中頃以降は須恵器の出土量が急激に減少していく傾向にあることが確認されている。

#### 土師器（図面107～109）

今回の調査区から検出された土師器については、杯や碗をはじめとする食膳具と、壺や鉢などの煮炊具とに出土量が二分される傾向にある。大半のものは後世の磨耗や破損により、調整法の識別はおろか、接合さえも僅ならなかったが、概して9世紀後半で以降になってから出土量を増す傾向にあり、その傾向は煮炊具の出土量に顕著にあらわされている。

#### 内面黒色土器（図面107～2033）

当調査区からは内面黒色土器も数個体分が出土している。このうち実測にたえるものは遺物番号2033とした1点のみである。後世における磨耗などのため、調整法などについては判然としないが、内面には磨き痕をのこす部分がみられる。

#### 墨書き土器「□万か」（図面107～2034）

9世紀後半で以降のものとみられる土師器の杯または椀の底外面に墨書きが記されている。部分的な検出にとどまっているため、文字の識別には検討を要するところもあるが、近隣の調査区から出土した墨書き土器の類例などを参照するならば、「万」という文字が記されている可能性が高いものと思われる。

#### 転用硯（図面103～1057）

当調査区からは転用硯が1点だけ検出されている。硯として転用されているのは8世紀後半の須恵器の杯B蓋であり、これによって東木津遺跡においては、当該期に文書活動がともなっていたことを改めて確認することとなった。内面の中央部には、実際に墨を塗ったとみられる部分が残存しているが、そこからやや端部よりのところには解説不明の墨痕も見受けられる。

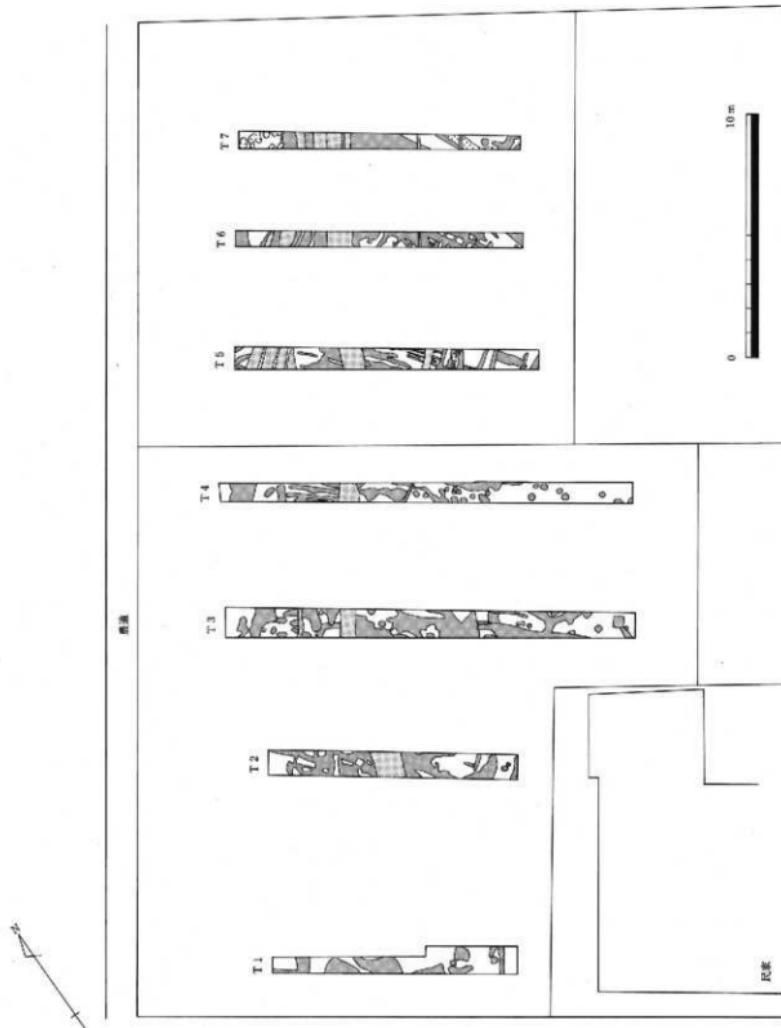
ちなみに、近隣の調査区からは、転用硯の他にも円面硯が数個体ほど検出されており、なかには幾何学文や人面を刻したものもある。

## ま と め

東木津遺跡については、過年度における発掘調査によって、宮衙的な様相を呈する遺跡であることが確認されている。今回の調査区からも転用硯や墨書き土器などの遺物が出土したことによって、そうした様相との共通性を若干なりとも確認するにいたっている。また、詳細な把握をするにはいたらなかったものの、多数に及ぶ土坑群も検出されており、なかには数基の上坑が直線状に並ぶものもあることから、この地において将来的に本調査が行われるようなことがあるならば、これらについては、構ないし掘立柱建物となる可能性も勘案されるため、今後の動向が注目されるところである。

律令期における東木津遺跡の歴史的性格をめぐっては、これまでにも複数に及ぶ意見が提起してきた。しかしながら、同遺跡における宮衙的な様相は、いまのところ8世紀中頃から9世紀前半までに限定でき、必ずしも長期の存続をとげたものではなかった可能性がある。また、周辺地域にも目を向けるならば、東木津遺跡を含む高岡市佐野地区一帯については、弥生時代から近世まで存続していくという特異性が見受けられ、そして、このうちの古墳時代においては小規模ながらも古墳が造営されるなど、概してこの周囲においては在地的な様相が所在していたことを検討でき、この一角をなす東木津遺跡についても、こうしたものを背景に、古代においては宮衙的な施設を造営せめたことを検討しうるものと思われる。

さて、その一時的に宮衙色を呈した様相については、律令期において如何なる立場にあったのであろうか。



一案ではあるが、下記に示す木簡がその案件を解く鍵になるのではないかと思われる。この木簡の真訳としては、現地の布師某という人物が、氣突神宮寺に何らかの物資を供したものと解することができる。そして物資に付していた木簡については、この地で不要となり、廃棄された可能性を問うことができよう。

表面 「氣突神宮寺涅槃淨土幣米入使」

裏面 「□附二年九月五日廿三枚入布師三口」 (154) × (21) × 5 (081)

証文中の「氣突神宮寺」の解釈をめぐっては、現在の石川県羽咋市に所在する氣多人社の前身をさすのか、それとも高岡市伏木の氣多神社をあらわすのかは検討の余地もあるであろうが、いずれにせよ、この木簡が東木津遺跡から出土したことをめぐっては、同遺跡が現地における出先機関として機能していたことをあらわしているものと思われる。

ちなみに、隣郡に該当するであろう礪波郡における当時の社会状況の一端をつたえる『越中国礪波郡倉納穀交替記』によれば、在地的な出自を勘案できる同郡の「川上村」「意斐村」「某村」においては正倉を有していたことが記されており、郡衙の出先機関として機能していたことを検討しうる土壤にある。もちろん、これまでの研究成果を勘案するならば、東木津遺跡が礪波郡に所属する可能性はむしろ低いものと思われるが、こうした史料の他、これまでに蓄積されてきた発掘調査成果などを総合的に考察していくならば、東木津遺跡については、在地的な様相を呈しながらも、一時的に官衙的な機能を有していたことが窺え、上記の「川上村」をはじめとする3村との共通性も見いだしうるため、その歴史的性格をめぐっては、出先機関という視点をもって今後検討を加えていくのも一案ではないかと考える次第である。

なお、東木津遺跡における過去度の調査では、上記の木簡の他にも「布忍(師)郷」と刻書された須恵器の横瓶も出土しているが、同郷と東木津遺跡との関連については、詳細な検討を要するものと思われる。また、この西方に位置する中保B遺跡についても、礪波郡の出先機関として機能した時期があるとの見解も提起されており、これとの対比も興味深い。

(根津)

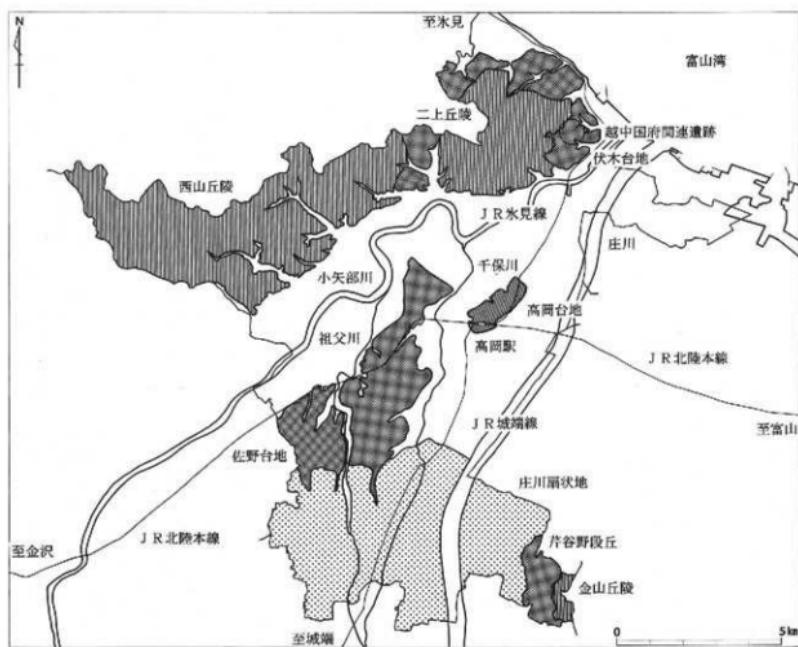
#### 参考文献

- 荒井隆・岡田一広 「東木津遺跡」「木簡研究」21 2000 他  
宇野降夫 『律令社会の考古学的研究——北陸を舞台として——』 杜書房 1991  
川崎晃 『越木簡覚書——飛鳥池遺跡と東木津遺跡の木簡——』『高岡市万葉歴史館研究紀要』11 2001  
金田章裕 『古代莊園図と景観』 東京大学出版会 1998  
鈴木景二 『越中における古代莊園図研究の動向』『富山史壇129』 1999  
山中敏史 『古代地方官衙遺跡の研究』 城書房 1996  
高岡市教育委員会 『高岡市遺跡地図』 2000  
高岡市教育委員会 『東木津遺跡 山崎地区』『市内遺跡調査概報』X I 2001  
高岡市教育委員会 『東木津遺跡 (堀井地区, セーブオン地区, チックタック地区)』『市内遺跡調査概報』X 2000

※ 土色については、『新版 標準土色帖 (1990年度版)』を使用した。

## 4. 越中国府関連遺跡

### — 奥村地区の調査 —



第24図 越中国府関連遺跡・位置図 (1/15万)

### 遺跡概観——特に越中国分寺をめぐって——

「越中国府関連遺跡」は、高岡市伏木台地上の一帯を占める遺跡である。これまで行われた大小多数に及ぶ発掘調査や文献史学をはじめとする研究によって、この台地上には国府や郡衙、あるいは国分寺などが所在したものと考えられている〔高岡市教委1986他〕。ちなみに、越中国府関連遺跡には古代瓦の出土地が集中するという特異性を窺え〔北陸古瓦研究会1987〕、周辺には古代における瓦葺きの建物が点在していた可能性がもたれる。

今回、試掘調査を行った「奥村地区」は高岡市一宮に所在する。近接する字国分堂においては「国分寺」と称する古刹・薬師堂が建立されているが、この古刹については、その名称もさることながら、弘仁期の作とされる木造の帝釈天立像や二躯の天部像などが安置されていたことをはじめ、境内の規模に比して大掛かりな礎石が所在することなどから、越中国分寺の面影をしのぶものとされ、はやくから注目を集めてきた。

昭和11年(1936)と12年には、上田三平氏や堀井三友氏らによって当該地の発掘調査がなされた〔堀井1938〕。このときの調査区は、それぞれ図27のA及びB付近に該当するが、ここからは後に「国分寺式」と呼ばれることとなる古代瓦などが出土し、当該地には瓦葺きの構造物が所在したことが窺われるにいたった〔古岡・西井1987〕。昭和41年(1966)には「越中国分寺とその周辺遺跡調査団」によって同境内が発掘調査されたが、ここでも上記と同様に古代瓦などを検出し、越中国分寺の所在をめぐっては、この周辺地区を舞台にさらなる注目が集まることとなった〔同調査団1968〕。

全国に点在する国分寺について——特にその造営をめぐっては、天平13年(741)2月の聖武天皇による「国分寺創建の詔」が大きな画期となつたと解されている。しかし、その後に出された律令政府からの再三にわたる督促や財政措置が講じられたことなどを勘案し、全国規模においても、その進捗は必ずしも順調で済ではなかったと解される傾向にある。

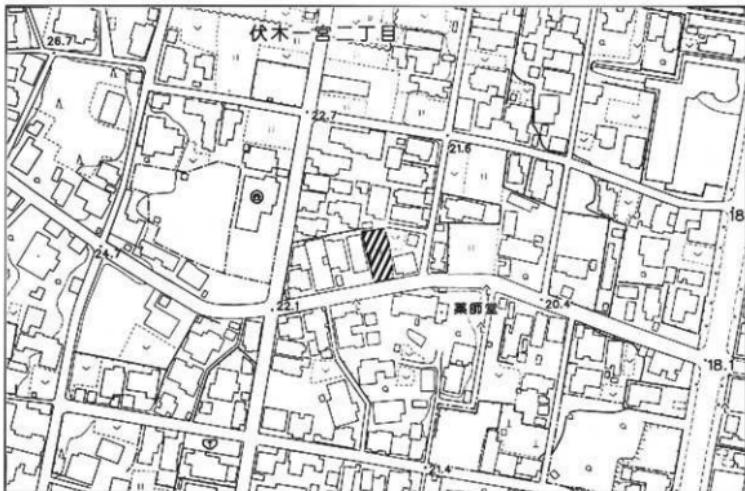


図25. 越中国府関連遺跡（奥村地区）・調査区位置図

ちなみに、この薬師堂をとりまく周辺では、上述した3度の発掘調査の他にも、高岡市教育委員会による試掘調査が数件ほど実施されているが、いずれの調査においても伽藍配置を明確につかむだけの成果は挙げられてはいない。したがって、越中国分寺をめぐっては、伽藍の様式や寺域はおろか、この薬師堂の周辺に同寺が実在したという確証さえも得られていはないに等しく、現状においては発掘調査によってその実在をしめすだけの物証が得られることが望まれる現状にあると言えよう。

#### 調査区概観

今回の調査については、平成14年に奥村利雄氏から農地転用届けが高岡市農業委員会に提出され、同委員会を通して高岡市教育委員会に埋蔵文化財にかかる照会が寄せられてきたことに端を発するものである。しかし、当該地については越中國府関連遺跡の包蔵地として指定を受け、かつ「越中國分寺跡」として県指定史跡となっている地とも近接することから、事前に試掘調査を実施する必要性が生じ、奥村氏のご了承のもと、平成14年9月19日から10月3日にかけて調査を行った次第である。調査対象面積は310m<sup>2</sup>であり、このうちの54.6m<sup>2</sup>の範囲を掘削した。

### 検出遺構

当調査区からは多数の遺構が検出されている。試掘調査ということもあり、遺構内部の掘削は基本的に行っておらず、その全体像までは把握されてはいないが、以下ではその概要を述べていくこととする。

#### 土坑 SK01

第2トレンチの中央やや北よりの地点で検出された直径約1mの土坑とみられる遺構である。片側が調査区外へと達しているため、小規模な溝状遺構となる可能性もある。覆土は褐灰色粘質土（Hue2.5Y4/1）である。調査区が狭小なため、掘立柱建物の掘方となる可能性などについては明確に旨及できない。

#### 溝状遺構 SD01

第1トレンチの北端から検出されている幅約1.2mの溝状遺構である。覆土は褐灰色粘質土（Hue2.5Y4/1）であり、SD03とも共通している。遺構内を掘削してはいなかったため遺物の出土はみていない。両側が調査区外へと達しているため全体像などは不明であるが、隣接する第2トレンチの北端からも溝状遺構SD03が検出されており、位置関係からみて双方は連結する可能性がある。

#### 溝状遺構 SD02

第1トレンチの南方から検出された幅0.7mほどの溝状遺構である。第1トレンチとは1.8mから2m程度の距離をあけるものの、同遺構とは概ね平行する位置関係にある。覆土についてもSD01らと共に、褐灰色粘質土（Hue2.5Y4/1）を呈している。

#### 溝状遺構 SD03

若干上述をしたが、第2トレンチの北端から検出された幅1.5m前後の溝状遺構である。遺構を完掘していない現状においては遺構平面が異質であるようにも思えるが、覆土などが共通することから、SD01と連結する可能性ももたれる。

#### 溝状遺構 SD04

溝状遺構SD03と土坑SK01との中间地点で検出された溝状遺構である。SD02と連結する可能性もあるが、現状においては平面形がやや不整形である。覆土は褐灰色粘質土（Hue2.5Y4/1）を呈しており、SD02をはじめとする周辺の遺構群と共通する。

なお、仮に上記した溝状遺構群が、今回の調査区を越えた地点においても、なおも平行関係を維持したま

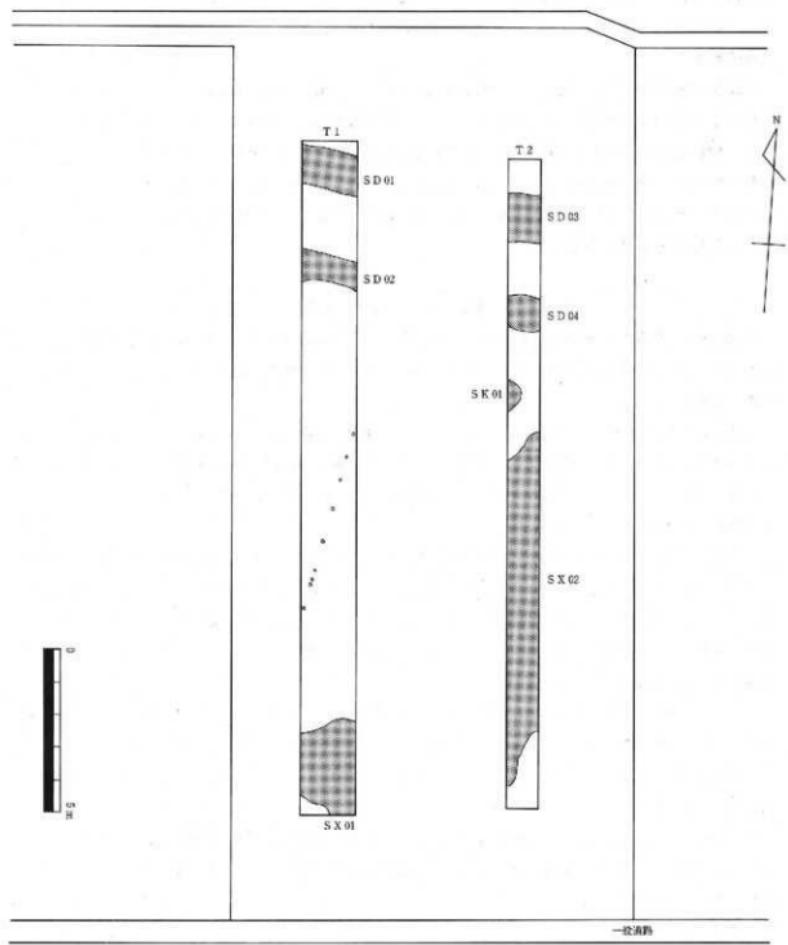


图 26. 越中国府間連遺跡（奥村地区）・概観図（縮尺 1/150）

まで周囲を区画し続けるようなことがあったならば、以前に想定された越中国分寺の寺域と、ほぼ同様の計画網上に照合してくる可能性がある（図27参照——『越中国分寺とその周辺遺跡調査団』1968より）。

しかしながら、仮に双方の構をもって回廊に伴う雨落溝などと解しようにも、造構どおしの間隔が1.8mから2mしかなく、国分寺クラスのそれとするには類例的に規格が物足りないため、やはり今後も周辺地域において地道な調査を継続していく、総合的な視野をもって国分寺の所在やその伽藍の様式などを検討する方が無難であると考える次第である。ただし、官衙施設とともに溝状造構の所在を追いかけていくという作業は、上面の削平が著しい伏木台地にあっては、古代の構造物の位置を確認していくための有効な方法論となっていく可能性があるのではないかと思われる。

#### 性格不明遺構 S X 0 1

第1トレンチの南端から検出された不整形の遺構であり、遺物番号6001とした古代瓦が検出されている。覆土は周辺の遺構と同様に褐色粘質土(Huc2.5Y4/1)を呈する。調査区が狭小なため、その全体像などの詳細については不明な点が多い。

#### 性格不明遺構 S X 0 2

第2トレンチの南方に位置する遺構である。やや大型のプランをもつが、隣接する第1トレンチ内の遺構の在り方を参照するかぎりでは、あまり大規模な遺構となる可能性を問うかぎりでもない。覆土は褐色粘質土(Huc2.5Y4/1)を呈する。本址からは遺物番号3003とした瓦器の火鉢が検出されているため、本址については中世以降に埋没したものと考えられる。

## 出土遺物

今回の調査区からは古代瓦が多数出土しており、当調査区から出土した遺物の約半数を占めているが、土器や須恵器をはじめとする古代の遺物の他、珠済や瓦器などといった中世のものも出土している。

遺物の出土は2本のトレンチのほか全城からみられたが、昨秋までの耕作土の直下にあたるⅡ整地層から出土したもののが大多数を占める。これらの全てに記載を加えることは不可能であるが、以下では、これらの概略について述べていくこととする。

#### 須恵器（図面110～1136～1147、図面111～1148～1150）

須恵器については、杯や碗などといった食膳具の他、盃や大甕などの貯蔵具、さらには1点だけではあるが転用鏡なども検出されている。概して8世紀後半代から10世紀代までのものが出土しており、周辺に所在した施設の活動期間を勘案するための資料となる可能性をもつと思われる。

なお、上記した存続年代については、他地域における国分寺や国府の盛行期とも大筋で一致することとなる。また、当該地においては8世紀中頃以降に比定される古代瓦が検出されている他、過去の調査では、灰釉陶器や鏡などといった遺物も近隣から出土しており、総じて瓦葺きの構造物を伴う官衙的な様相が周辺に所在したものと考えることができよう。

#### 土師器（図面110～2068～2079、図面111～2080～2082）

当遺跡から出土した土師器については、後世の磨耗や破損があったため、接合はおろか、調整法の識別さえも不明瞭なものが大半を占めたが、概観するかぎりでは、古代と中世のものとに大別しうる。

内訳としては、古代の土師器の出土が圧倒的数量を占め、中世の土師器は遺物番号2081と2082の2点が確認されるのみである。ただし、古代の土師器についても、年代的には9世紀以降のものが多いという傾向にある。

#### 転用硯（図面 110－1136）

当調査区内からは転用硯も 1 点だけ出土している。墨痕は薄く残る程度であったが、内面のほぼ全域にわたってこれが見受けられる。8世紀後半代の須恵器の杯B蓋を転用しており、これによって、当該期には文書活動を伴っていたことを窺わせる。

#### 瓦塔（図面 111－5002）

当調査区からは瓦塔も検出されている。検出されたのは屋蓋部の軒先にあたる部分であり、丸瓦を表現したとみられる 3 列以上の半竹管状の部位の他、軒先を表現したとみられるところも 1 階所残存している。全面にわたって浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6) の色調を呈しており、焼成状況も比較的軟質なものとなっている。器面が全面的に磨耗されているため、詳細な調整法などは不明である。

なお、近年においては旧越中国の範囲においても瓦塔の出土数が増えているが、今回の事例は越中国府関連遺跡としては初めての出土例となる。いまのところ、瓦塔の用途については確定してはいないが、国分寺の所在した可能性を問える当該地から、仏教的な信仰の対象となりうる瓦塔を伴っていたことを確認したという点で、今回の瓦塔の出土は、今後の伏木台地における研究にとっても有意義なものになったものと思われる。ちなみに、能登国分寺でも多数の瓦塔が出土しており興味深い。

#### 古代瓦（図面 112～119）

今回の調査区からは、総計 251 点の瓦片が出上している。越中国分寺にかかるものとされてきた古代瓦としては、単弁有子葉の八葉蓮華文を有する軒丸瓦と、均輪唐草文を有する軒平瓦が代表的であるが、今回の調査では丸瓦と半瓦のみが出土している。

なお、遺物番号 6004 の丸瓦については、広端部に弧を描くような沈線が見受けられるが、この部分については瓦を作成する際にいたるものと考えられ、特に文様をあらわすものではないと思われる。また、遺物番号 6024, 6025, 6033, 6038, 6046 などといったものについては、国分寺式瓦の調整法と理解されている「離れ砂」技法が用いられていることから、現状では 8 世紀中頃以降のものである可能性を考慮しうる。さらに、平瓦については凹面には布目が、凸面においては鈍目叩きの痕跡が見受けられるものが多い傾向にあるが、この点は從来までの周辺における調査成果と一致することとなる。

#### 瓦器（図面 111－3003）

当調査区内からは瓦器の火鉢も出土している。色調は全体的に黒色を帯び、ナデによって最終的な調整がなされている。また、体部を内湾させ、肩部にみられる 2 本の謹帶内には珠文がはりつけられている。前述したように、この遺物は性格不明遺構 S X 0 2 の覆土から出土したものであり、同遺構が中世以降に埋没したことを裏付けている。

#### 川原石

見掛けの上では明らかな自然石ではあるものの、今回設定した 2 本のトレチのほぼ全域から多量の自然石が出土しているので、合わせて報告しておきたい。

これらの自然石は概ね 3.5 cm 以下のものがほとんどであり、どれも割口は丸みを帯びている。出土層はいずれも遺構確認面よりも上位の層に限られるが、周辺地域においては地山に自然石が含まれない傾向にあることから、今回出土した自然石については、何らかの用途にしたがってこの地に持ち込まれた可能性もあるのではないかと思われる。



図27. 越中国府関連遺跡（奥村地区）・調査区概観図 A：昭和11年の調査区 B：同12年の調査区

## ま と め

越中国府関連遺跡（奥村地区）における試掘調査の概略を述べてきた。今回の調査については、試掘調査ということもあって、必ずしも詳細な内容をひきだすには至らなかったものの、古代瓦をはじめとする多彩な遺物が出土したことから、調査頻度の少ない同遺跡にあっては貴重な成果を追加したものと思われる。

当該地の歴史的様相を考察するにあたっては、越中国分寺との対比を避けて通ることのできない状況にあるが、今回の調査を含むこれまでの発掘調査によって、その周辺においては瓦葺きの構造物が造営されていたことを確実視できよう。また、出土数は少ないながらも、越中国分寺の盛行期とも大筋で一致する8世紀後半代から10世紀代の遺物が出土しており、上記した瓦の出土などと相まって、越中国分寺の所在をうらうう上でも、大いに検討をするにあたっては貴重な成果を追加したものと思われる。

さらに、今回の調査において瓦塔が出土したことについても、当該地の研究にとって有意義な成果となつたものと思われる。現状の研究において、瓦塔の使用目的は必ずしも明らかにされてはいないが、能登国分寺の例などのように、国分寺が所在した遺跡においても瓦塔を伴う例があるため、双方の対比から越中国分寺の所在を検討していくことも研究法の一案に浮上していく可能性があるのではないかと思われる。

## 参考文献

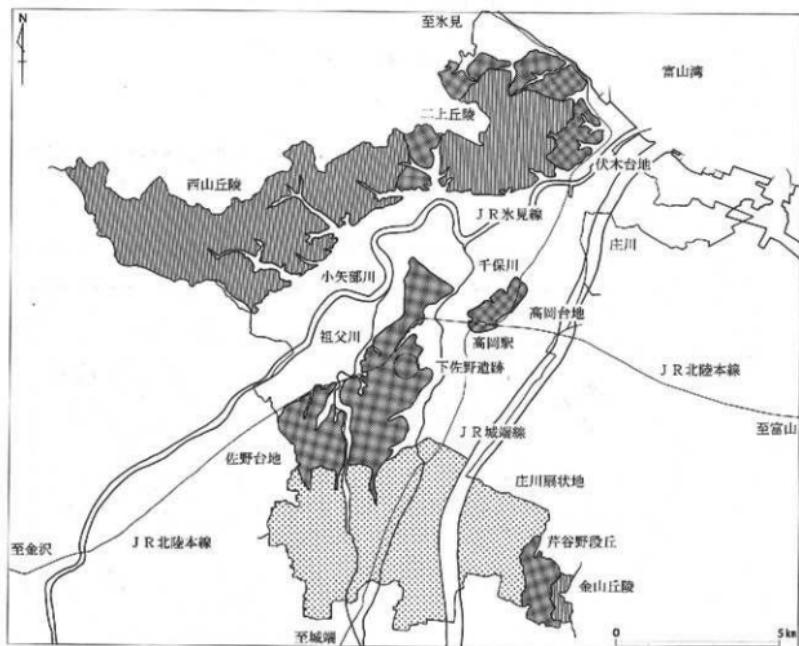
- 越中国分寺とその周辺遺跡調査団『越中国分寺とその周辺遺跡調査報告書』 1967  
川崎亮「越木簡覚書——飛鳥池遺跡と東木津遺跡の木簡——」『高岡市万葉歴史館研究紀要』11 2001  
高岡市「高岡市史 上巻」 1959  
高岡市「たかおか 歴史との出会い」 1991  
高岡市教育委員会『越中國府関連遺跡調査概報』 I ~ IV 1988 ~ 1996  
富山県「富山県史 史料編I 古代」 1970  
七尾市教育委員会『史跡能登国分寺跡』 1989  
長島正勝「越中國分寺跡発見古瓦」「考古学雑誌』27-4 1937  
堀井三友「越中國分寺」「國分寺の研究」 1938  
堀井三友「越中國分寺跡」「國分寺跡之研究」 1956  
古岡英明「昔の伏木」「伏木の文化」 1956  
古岡英明・西井龍儀「越中國分寺」「北陸の古代寺院——その源流と古瓦……」 1987

※、古代瓦を検討するにあたっては、西井龍儀氏のご協力を戴いた。

※、上色等については、『新版 標準土色帖(1990年度版)』を使用した。

## 5. 下佐野遺跡

— 黒越地区・荒木地区の調査 —



第28図 下佐野遺跡・位置図 (1/15万)

### 遺跡概観及び調査にいたる経緯等

「下佐野遺跡」は、高岡市の佐野台地の北部に位置しており、主に弥生時代後期を中心とする遺跡として認識されている。周辺には、弥生時代の中頃から近世までの遺跡群が形成されており、下佐野遺跡についても、この様相の一角をになっていたものと思われる。

今回報告するのは、同遺跡の「黒越地区」と「荒木地区」である。前者については、平成14年度に黒越三郎氏が高岡市佐野1030の地に個人住宅の建設を計画し、高岡市教育委員会文化財課に当該地における埋蔵文化財の調査にかかる照会を寄せてきたことに端を発するものである。しかしながら、当該地については下佐野遺跡の包蔵地として周知されていたことから、協議の結果、事前に試掘調査を実施する運びとなった。屋外調査は平成14年8月26日に実施した。対象面積は285m<sup>2</sup>であり、このうちの47.7m<sup>2</sup>を掘削した。

一方の「荒木地区」については、高岡市佐野514-4の地に荒木幹夫氏が個人住宅の建設を計画し、そして上記した黒越地区とほぼ同様な経緯をもって試掘調査を実施する運びとなったものである。この荒木地区については平成14年8月28日に試掘調査を実施した。調査対象面積は80m<sup>2</sup>であり、このうちの9.3m<sup>2</sup>を掘削した。この調査区からは遺物は出土しなかったが、溝状造構が1条検出されている。

### 黒越地区

#### 検出造構

#### 土坑群

第2トレンチで検出されたものである。規格については大小あるものの、黒褐色土の覆土を有すること全て一致する。調査区が矮小であったため、撲立柱建物などになる可能性については言及しがたい。

#### 溝状造構 SD01

第2トレンチの南東部において検出された幅約1.4mの溝状造構である。覆土は黒褐色土(Hue7.5YR3/1)



図29. 下佐野遺跡・黒越地区及び荒木地区 調査区位置図

を基本としながらも、直径数cm程度の地山ブロックを包含する。遺構の幅は相違するものの、隣接するSD02と連結して区画溝を形成していた可能性などについても検討する必要があると思われる。

#### 溝状遺構 SD02

第2トレンチの南東部隅で検出された幅40cm程度の溝状遺構である。覆土は黒褐色土(Hue7.5YR3/1)を基本としながらも、拳大ほどの地山ブロックを含有する。上述したように、隣接するSD01と連結して区画溝を形成していた可能性もある。

#### 畝状遺構 SX01

第1トレンチのほぼ全域にわたって検出されたものであり、幅1.5m前後の規格を呈するもので構成されている。覆土は黒褐色土(Hue7.5YR3/1)を基本とする。一部に切り合いがみられるため、畝状遺構とするならば新旧関係などもあることが考えられる。

### 出土遺物

#### 須恵器・杯(図30-1151)

当調査全区からは殆ど遺物が出土しなかったが、図30にしめす須恵器の杯と壺とが出土している。遺物番号1151とした前者については、底部を欠いているため詳細な型式などは不明なところもあるが、概ね8世紀後半から9世紀代のものとみられる。出土地点は第1トレンチ(図中のT1)の耕作土層下の黒色土であるが、この土層からは近代のものも出土しているため、同層については表上化しているものと思われる。

#### 須恵器・壺(図30-1150)

当調査区では、遺物番号1150とした須恵器の壺も出土している。残存しているのは胴下半部から底部にかけての部分であるが、年代としては8世紀後半代のものと思われる。昨年までの耕作土からの出土である。

### 荒木地区

#### 検出遺構

#### 溝状遺構 SD01

調査区と伴走するようにして検出された溝状遺構である。確認される範囲では最大幅は1.4mを呈し、概ね西南西方向から北東方向へと主軸をとっている。覆土は黒褐色土(Hue7.5YR3/1)を呈し、上述した黒越地区の遺構群の覆土と共通する他、同地区で検出された溝状遺構群、もしくは畝状遺構とも大局的には方位がそろっている。

(根津)

### 参考文献

- 高岡市教育委員会 「下佐野遺跡 横田地区」「市内遺跡調査概報」Ⅱ 1993
- 高岡市教育委員会 「下佐野遺跡 さのクリニック地区」「市内遺跡調査概報」V 1997
- 高岡市教育委員会 「下佐野遺跡 新田地区」「市内遺跡調査概報」IX 1999

※ 土色については、『新版 標準土色帖(1990年度版)』を使用した。

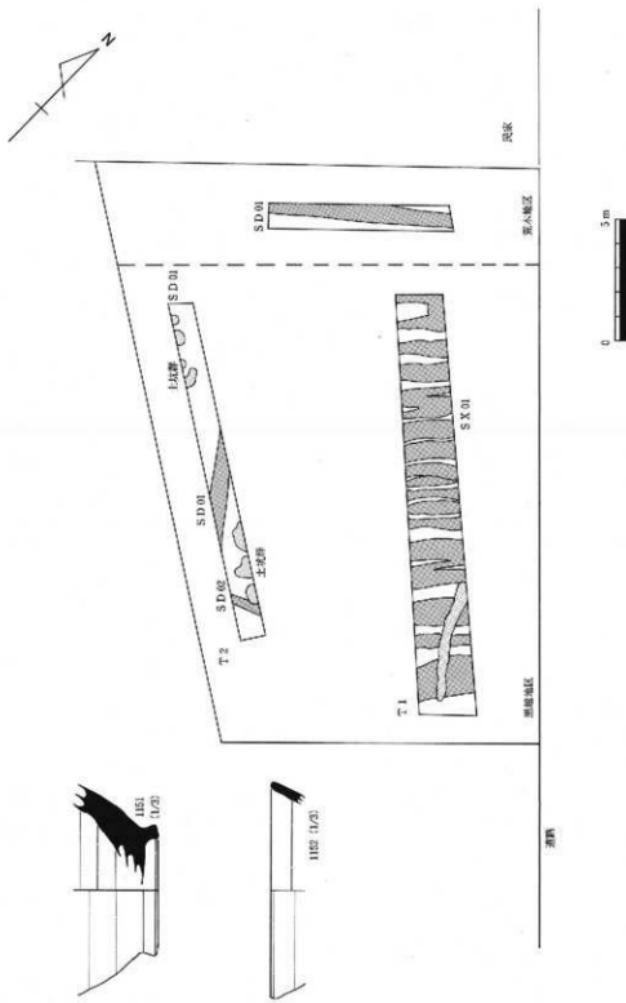


図 30. 下佐野遺跡・黒越地区及び黒木地区 調査区概観図 (縮尺 1/200)

その他の調査区の概要(平成14年度　市内巡回調査)

No.	調査名	地区	所在地	対象面積	調査面積	原凶者	開発の種別	検出遺構	出土遺物	調査期間	調査担当
1	石堀江之町遺跡	八田地区	高岡市上北島209番1外	1121m <sup>2</sup>	100 m <sup>2</sup>	八山穴明氏	施設医院の建設	なし	なし	4月15日	太田
2	中曾根北遺跡	向田地区	高岡市中曾根163番2外	750m <sup>2</sup>	70 m <sup>2</sup>	向山若志氏、 共同住宅の建設	なし	なし	なし	4月16日	太田
3	越中里府岡遺跡	井地区	高岡市伏木・宮林2区35番	945m <sup>2</sup>	30 m <sup>2</sup>	井登和氏	車掌兼物置の建設	なし	なし	5月8日～5月10日	荒井
4	木津神社遺跡	エリティア・パレス前	高岡市木津1006番1	340m <sup>2</sup>	80 m <sup>2</sup>	黒沢又十・ナ・ドコモ地盤	撮帯窓電線移動局の建設	なし	なし	5月20日～5月21日	荒井
5	中曾根北遺跡	塙谷地区	高岡市中曾根222-3	307m <sup>2</sup>	30 m <sup>2</sup>	塙谷伊申氏	美術院の建設	なし	なし	5月23日	太山
6	越中里府岡遺跡	裏村久地区	高岡市牧木一丁目161-1	802m <sup>2</sup>	80 m <sup>2</sup>	奥村久也氏	個人住宅の建設	なし	なし	7月25日	太山
7	石城遺跡	大竹地区	高岡市石城46番外	1223.52m <sup>2</sup>	109.72 m <sup>2</sup>	大井誠次氏	個人住宅の建設	なし	なし	7月29日～8月6日	根作
8	八日町遺跡	伊勢田地区	高岡市八日130番4	76m <sup>2</sup>	10 m <sup>2</sup>	伊勢田長悦氏	農作業場の建設	なし	なし	8月26日	荒井
9	北木津遺跡	清水地区	高岡市木津331番1	538m <sup>2</sup>	50 m <sup>2</sup>	清水勲氏	薪生場の建設	なし	なし	8月26日	太田
10	石堀立跡	清水地区	高岡市立町1228-2	770m <sup>2</sup>	90 m <sup>2</sup>	清水丈・氏	個人住宅の建設	なし	なし	12月4日～12月6日	荒井
11	塙谷古墳群	穂山地区	高岡市人田字塙谷33-16外	263m <sup>2</sup>	9 m <sup>2</sup>	船田秀治氏・船田美和氏	個人住宅兼考古院の建設	なし	なし	1月16日～1月17日	荒井

※、抜量工事及び工事立ち会いは実施した。  
※、調査着手した際に指摘。

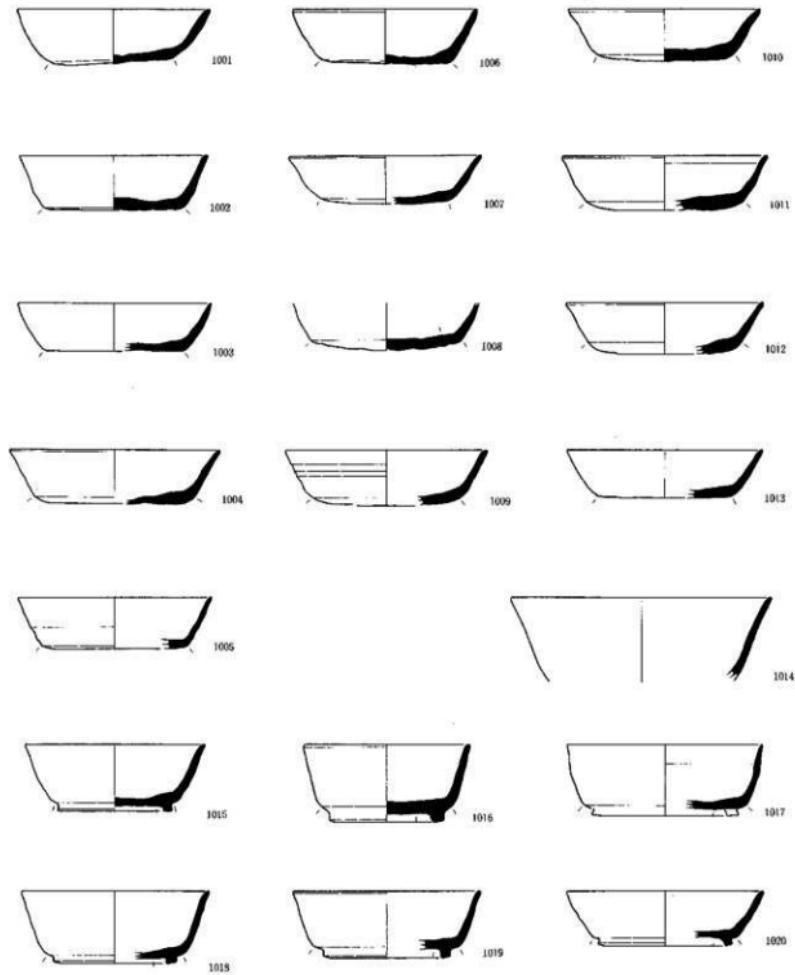
## 報告書抄録

書名	市内遺跡調査概報XIII
原書名	平成14年度 東木津遺跡・越中国府関連遺跡の発掘調査地
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第50冊
編集者名	根津明義 荒井謙 太田浩司
編集機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 Tel.0766-20-1463
発行年月日	西暦2003年3月28日

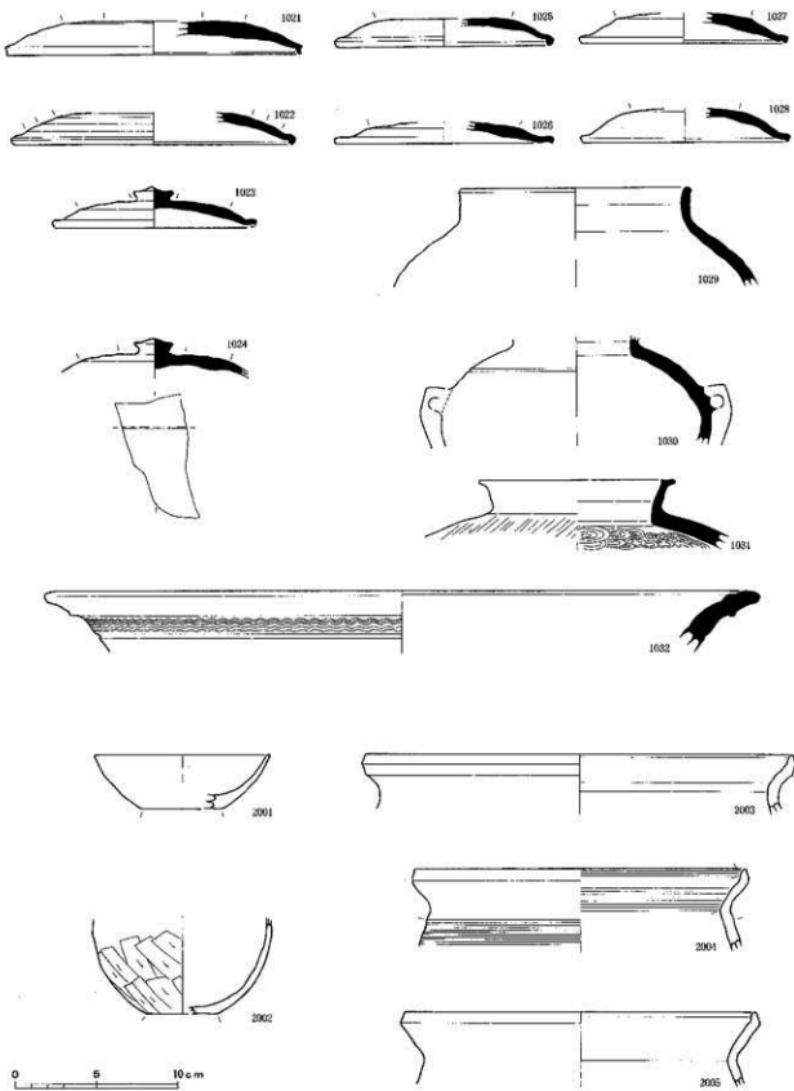
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東木津遺跡 (中山医院地区)	富山県高岡市 佐野845番1 外	01602	202150	36° 43° 36°	136° 59° 42°	20020513 ↓ 20020705	740m <sup>2</sup>	病院兼個人住宅の建設
瑞穂町遺跡 (大和ハウス工業地区)	富山県高岡市 瑞穂町148-1	01602	202153	36° 44° 50°	136° 59° 50°	20020422 ↓ 20020502	210m <sup>2</sup>	共同住宅の建設
東木津遺跡 (島字地区)	富山県高岡市 佐野371-1 外	01602	202150	36° 43° 36°	136° 59° 42°	20020902 ↓ 20020905	314.8m <sup>2</sup>	ガソリンスタンドの建設
越中国府関連遺跡 (奥村地区)	富山県高岡市 伏木一宮2丁 目543番	01602	202013	36° 47° 40°	137° 03° 15°	20020919 ↓ 20021003	54.6m <sup>2</sup>	個人住宅の建設
F佐野遺跡 (黒越地区)	富山県高岡市 佐野514-5	01602	202151	36° 43° 25°	136° 59° 30°	20020826 ↓ 20020826	47.7m <sup>2</sup>	個人住宅の建設
下佐野遺跡 (覚本地区)	富山県高岡市 佐野514-4	01602	202151	36° 43° 25°	136° 59° 30°	20020828 ↓ 20020828	9.3m <sup>2</sup>	個人住宅の増設
その他の遺跡	高岡市内	01602	—	—	—	—	—	賃人住宅の建設等
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
東木津遺跡 (中山医院地区)	官衙又は集落	奈良時代～平安時代前期	横壙、溝状遺構 直路址など	須恵器、土師器など				
瑞穂町遺跡 (大和ハウス工業地区)	集落	古墳時代、飛鳥時代、中世	土坑、溝状遺構など	須恵器、土師器、珠氈など				
東木津遺跡 (島字地区)	官衙	奈良時代～平安時代前期	土坑、溝状遺構など	須恵器、土師器、珠氈、青磁、墨書き器など				
越中国府関連遺跡 (奥村地区)	官衙又は寺院	奈良時代～平安時代前期、中世	土坑、溝状遺構など	須恵器、土師器、古代瓦、瓦器など				
下佐野遺跡 (黒越地区)	集落	弥生時代、古代	土坑、溝状遺構など	須恵器、土師器				
下佐野遺跡 (覚本地区)	集落	弥生時代、古代	溝状遺構					
その他の遺跡	—	—	—					

図 面 編

圖一〇一 東木津遺跡（田中醫院地區）

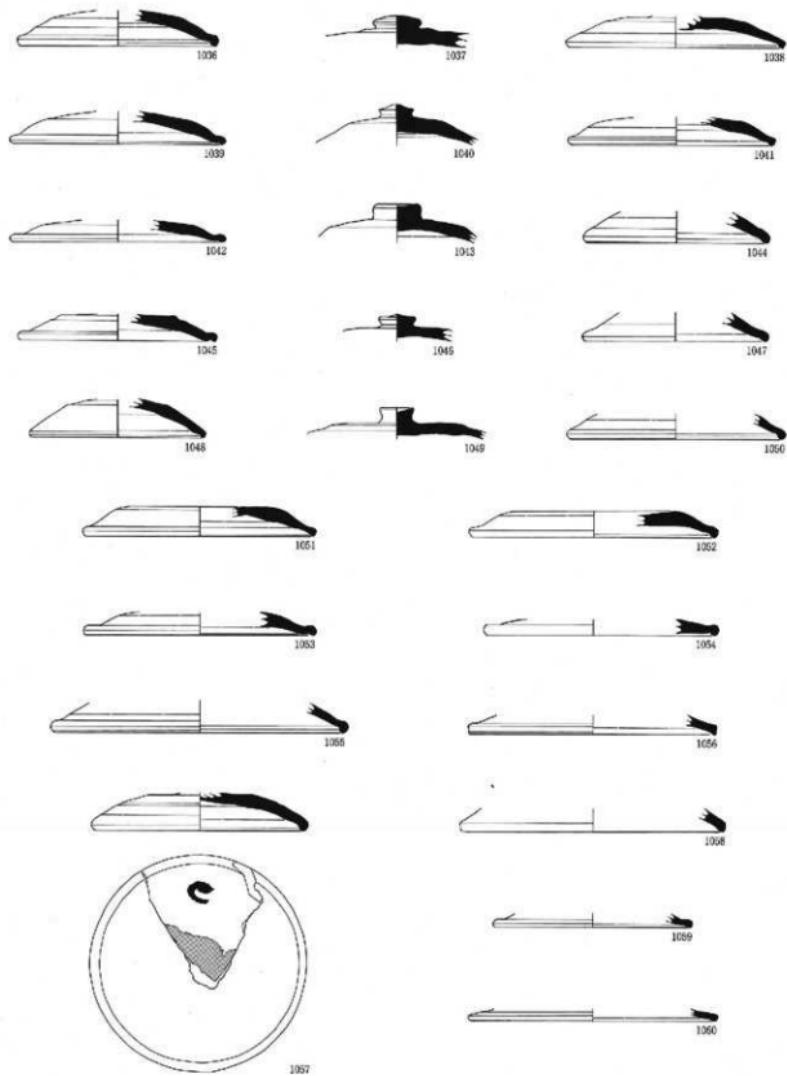


0 5 10 cm

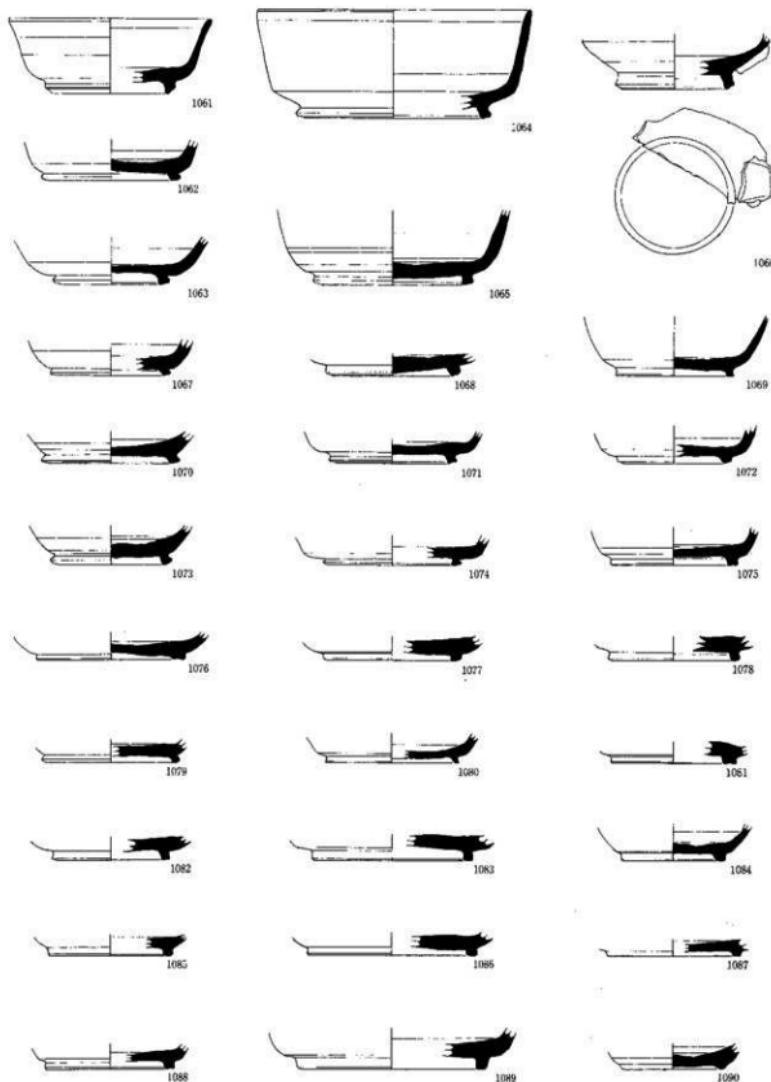


土器類 = 紋底器；1021～1032、土師器；2001～2005

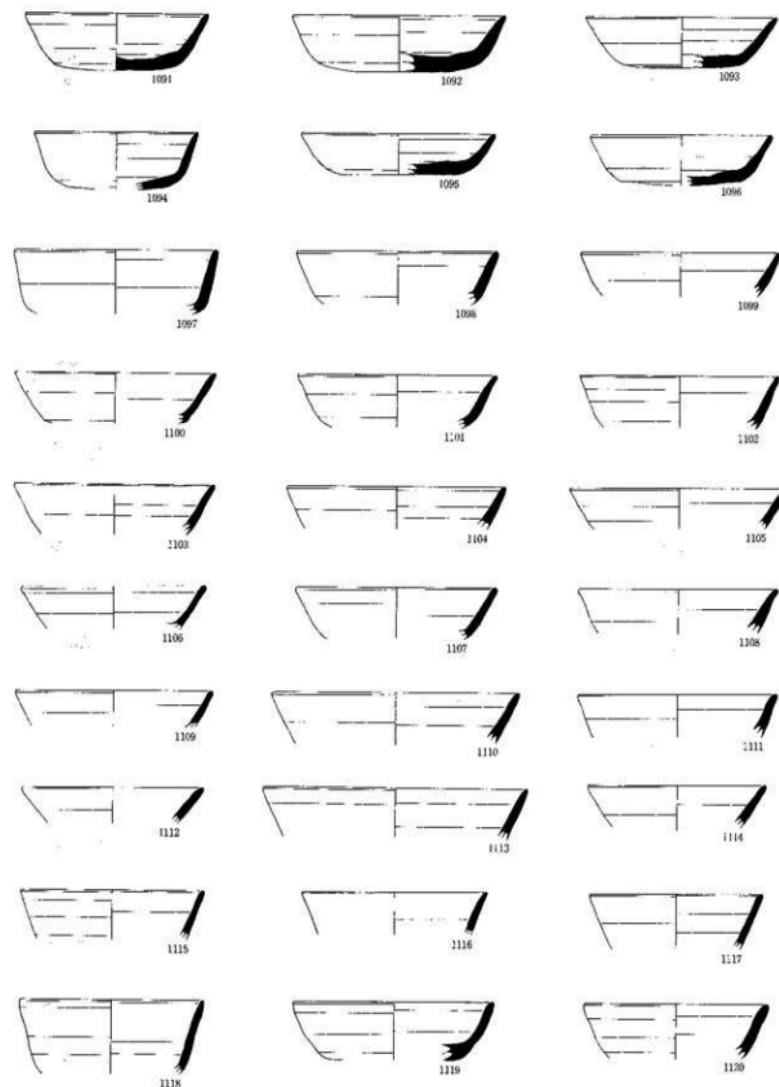
圖一〇三 東木津遺跡（烏宇地區）



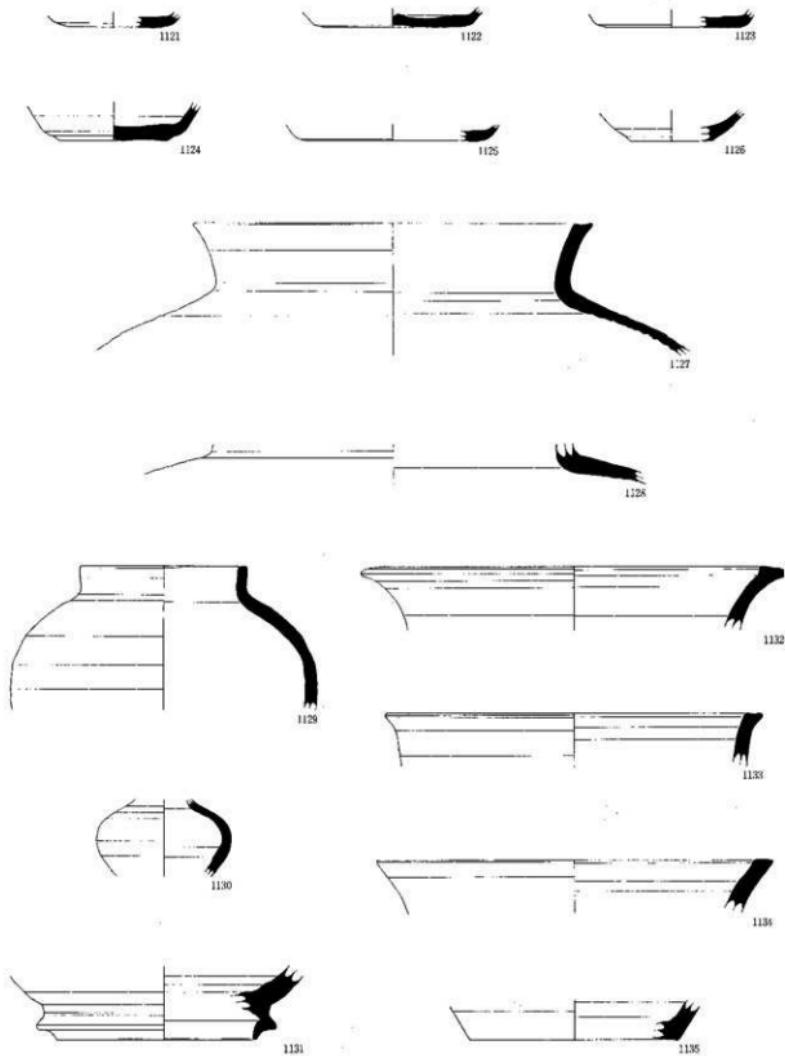
図面一〇四 東木津遺跡（烏宇地区）



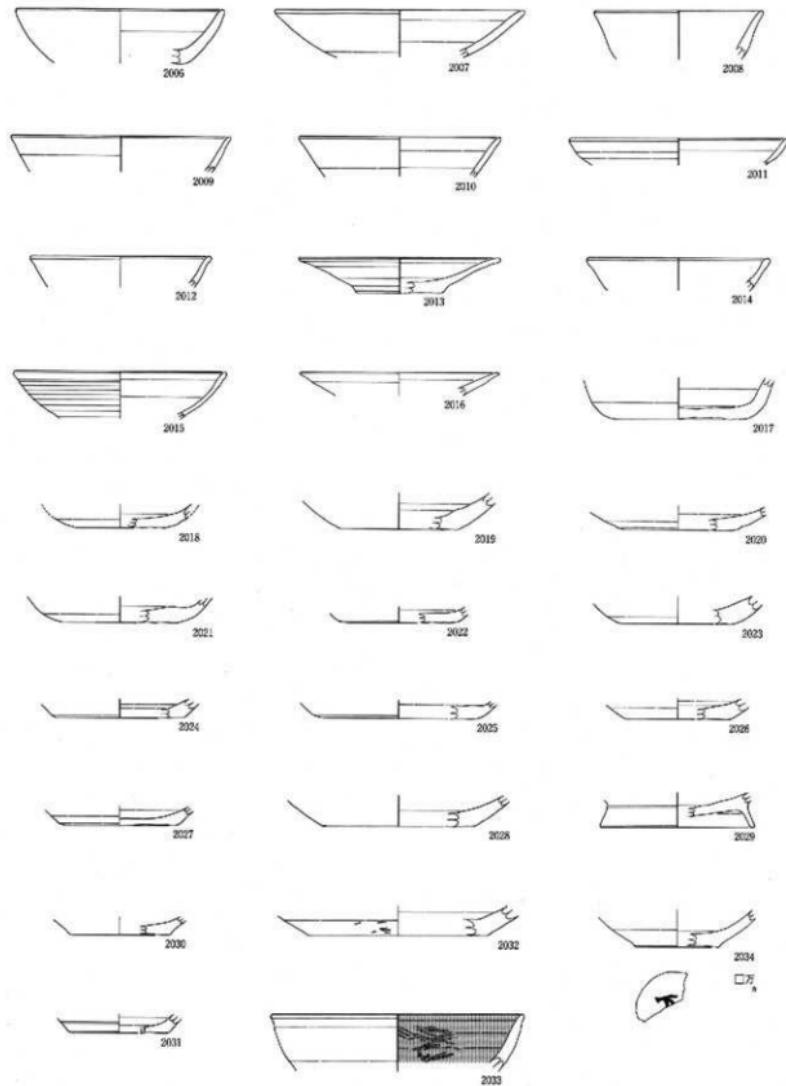
図面一〇五 東木津遺跡(島宇地区)



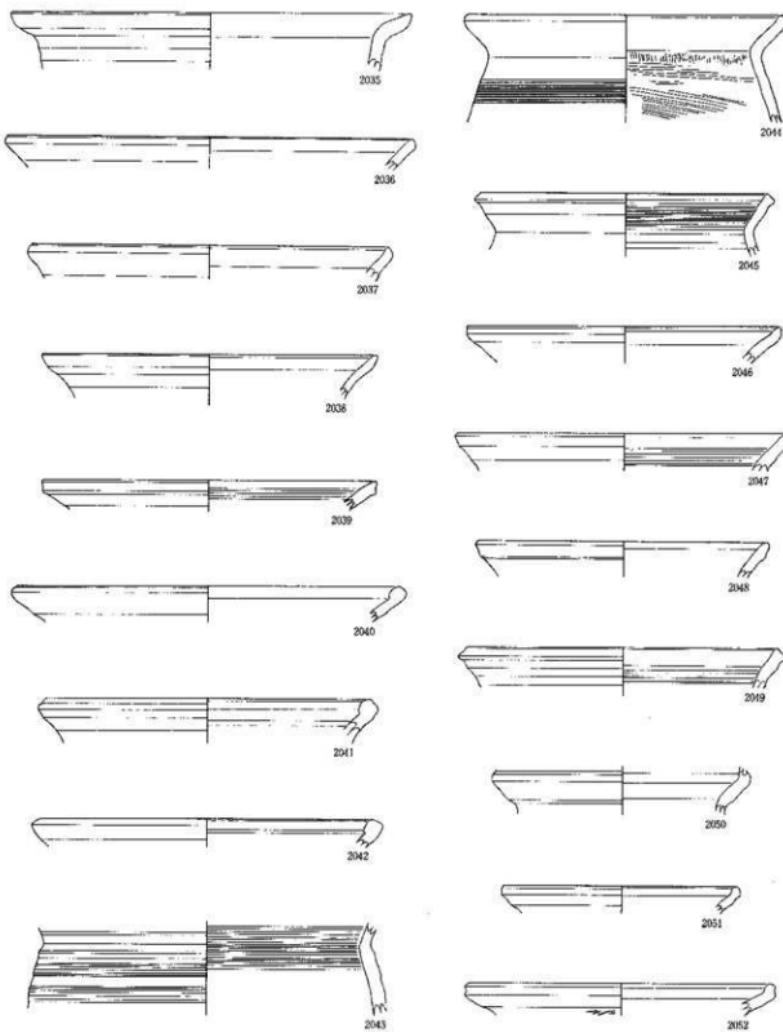
圖面一〇六 東木津遺跡（局宇地区）



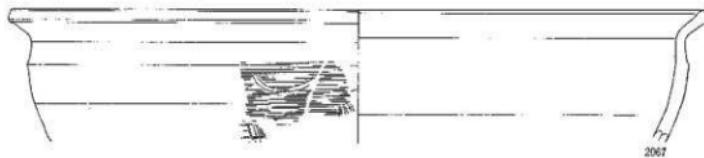
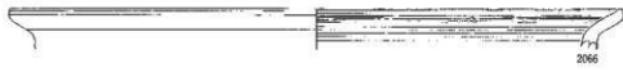
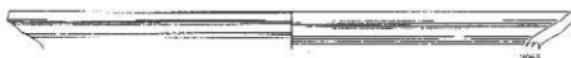
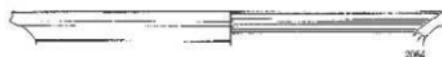
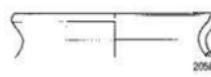
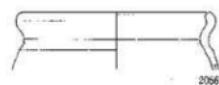
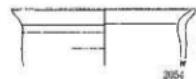
図面一〇七 東木津遺跡（島宇地区）



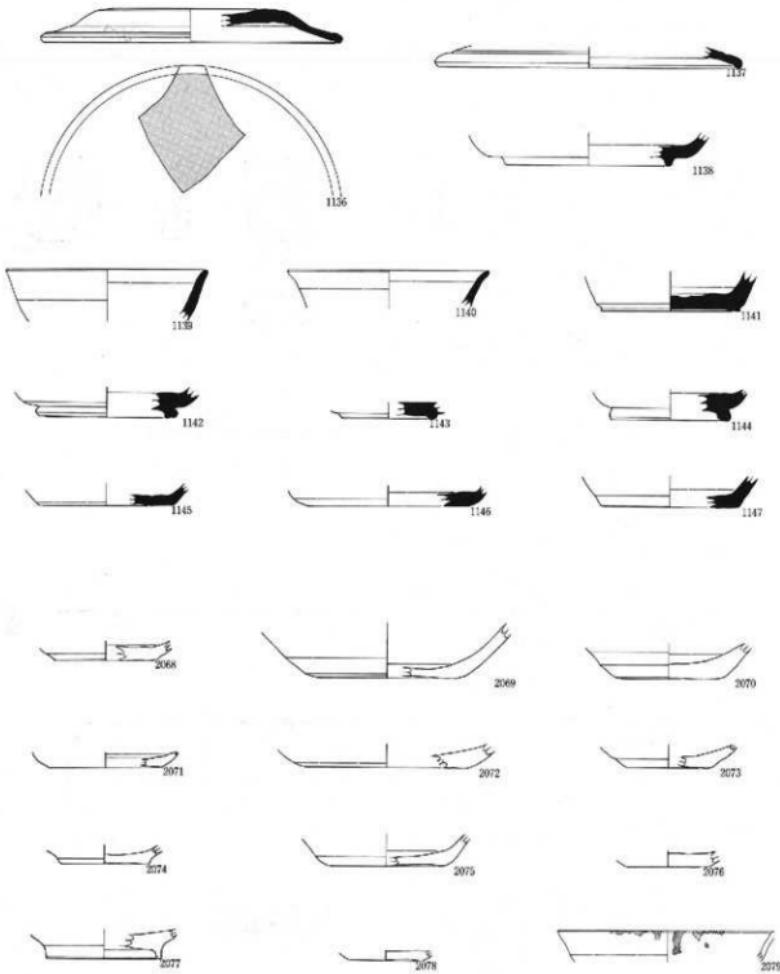
図面一〇八 東木津遺跡(鳥居地区)



圖面一〇九  
東木津遺跡（烏字地區）

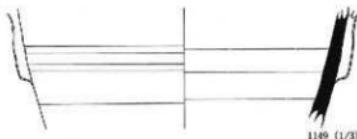


圖一一〇 越中國府関連遺跡（奥村地区）

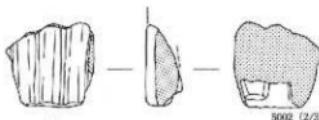




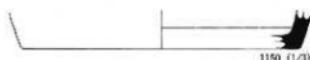
1148 (1/4)



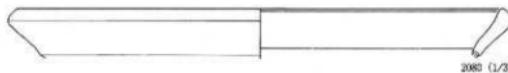
1149 (1/3)



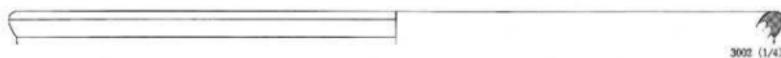
5002 (2/3)



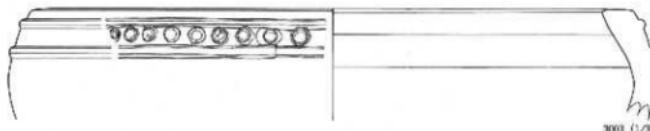
1150 (1/3)



2080 (1/3)



3002 (1/4)



3003 (1/3)

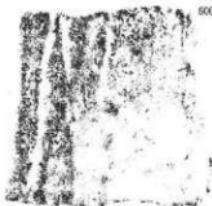


2081 (1/3)

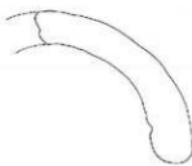


2082 (1/3)

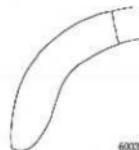
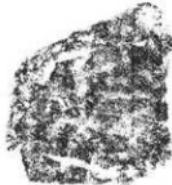
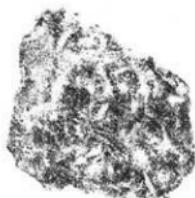
圖面一二 越中國府閩連遺跡（奥村地区）



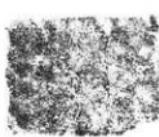
6001



6002



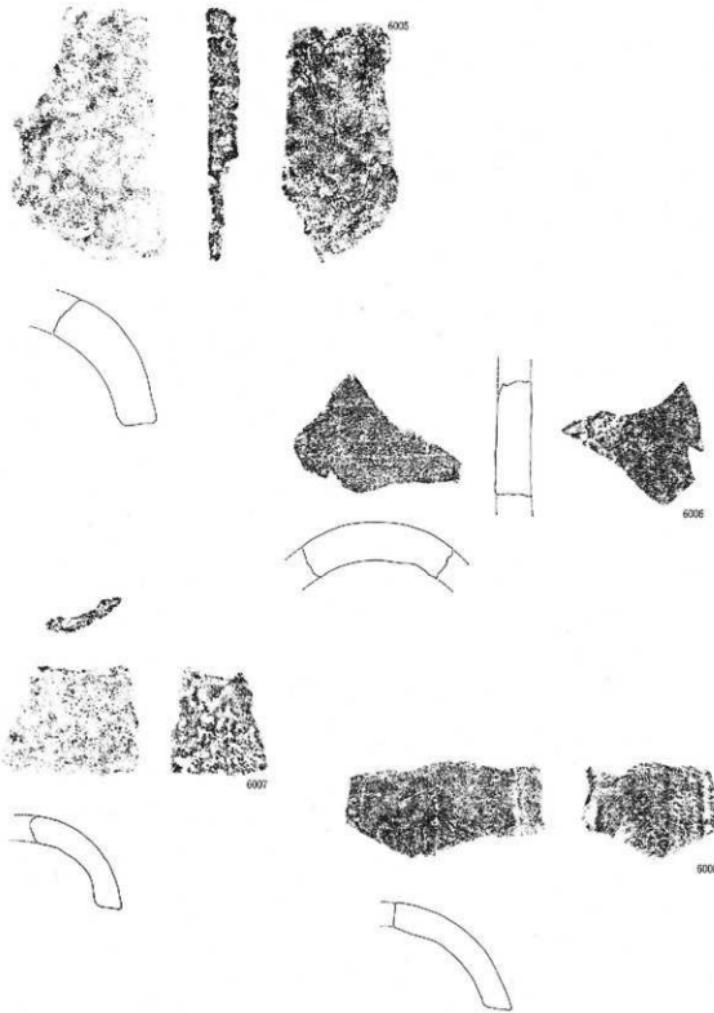
6003



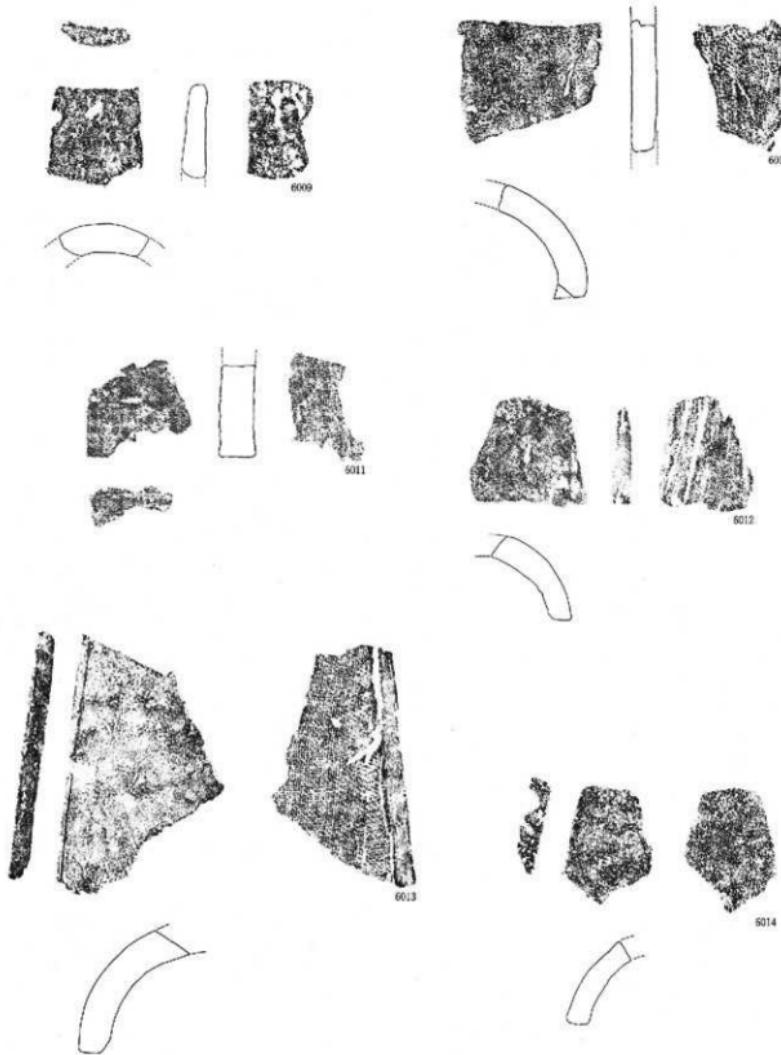
6004



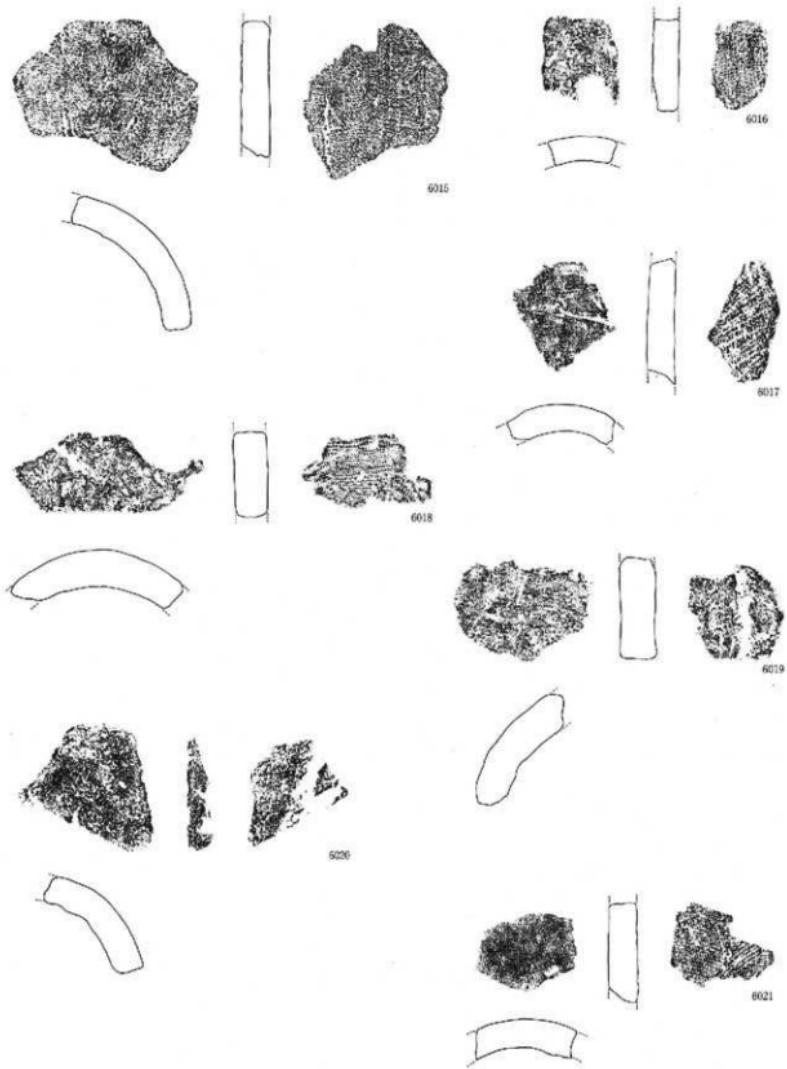
圖面一三 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



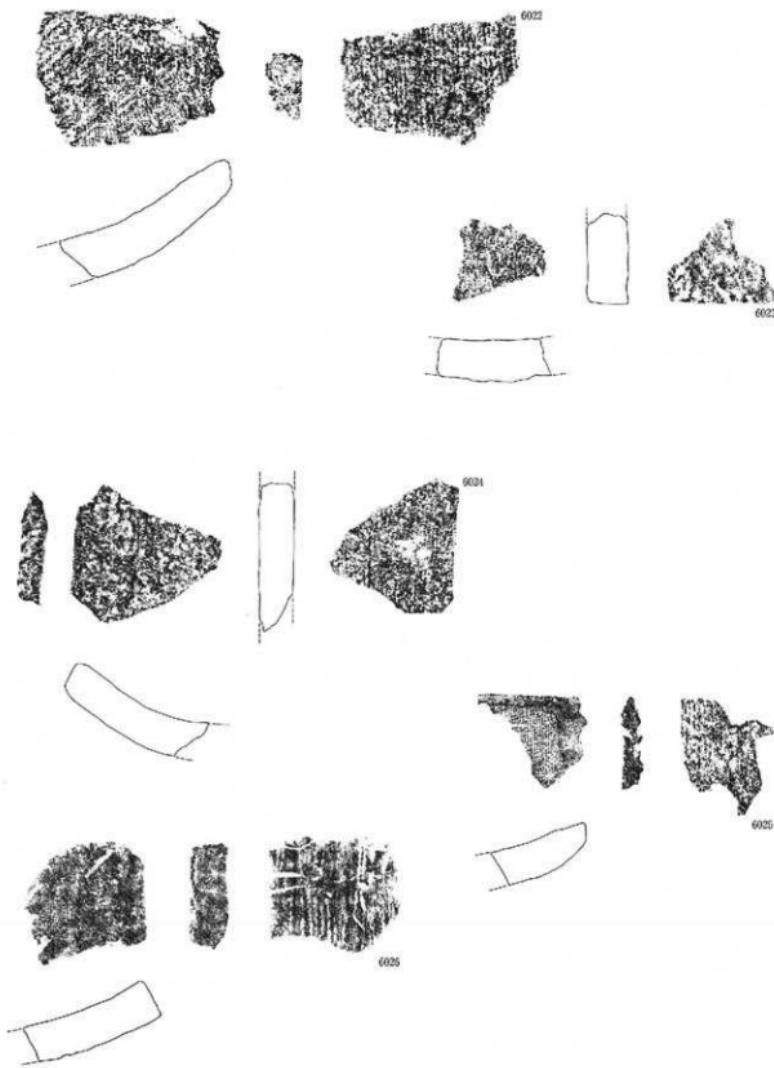
圖一四 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



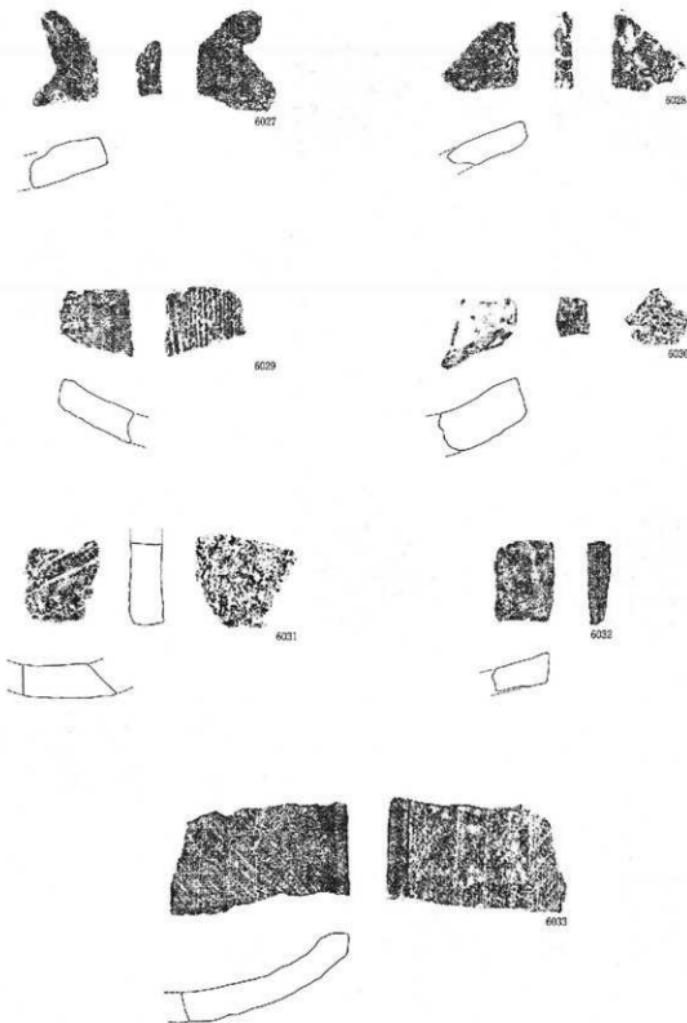
圖面一—五 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



圖一六 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



圖面一七 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



圖面一八 越中國府閩連遺跡（奧村地區）



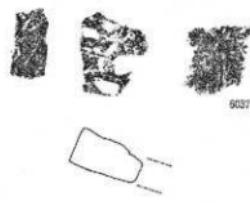
6034



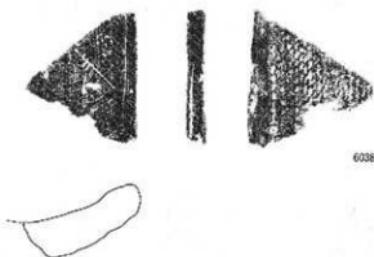
6035



6036



6037



6038



6039

圖面一—九 越中國府閩連遺跡（吳村地區）

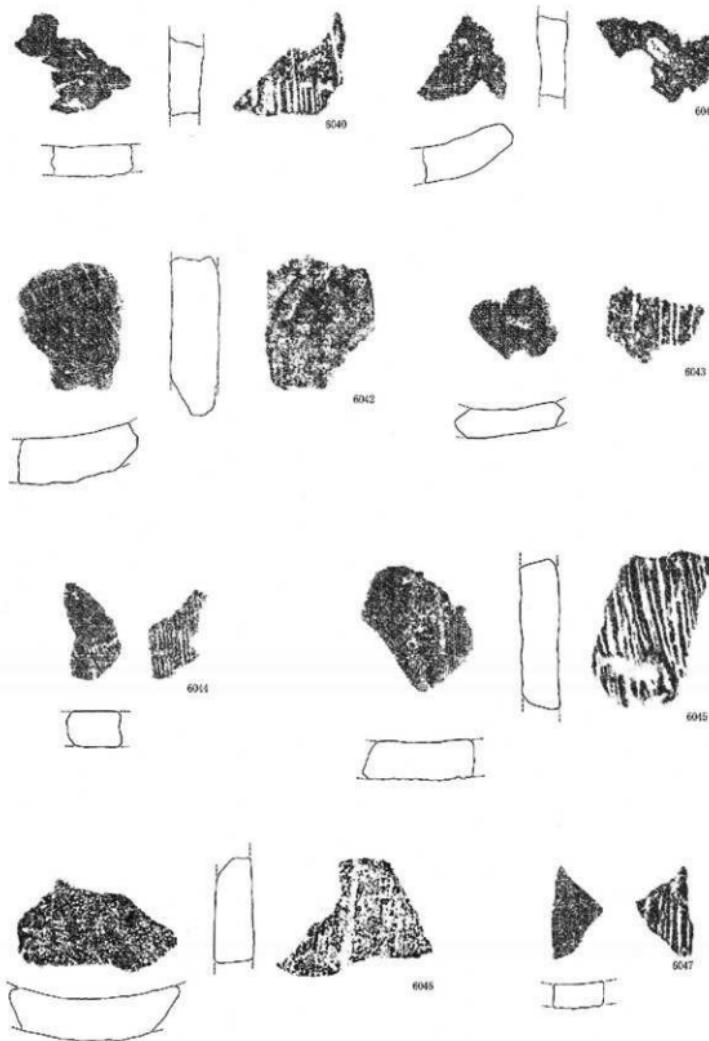
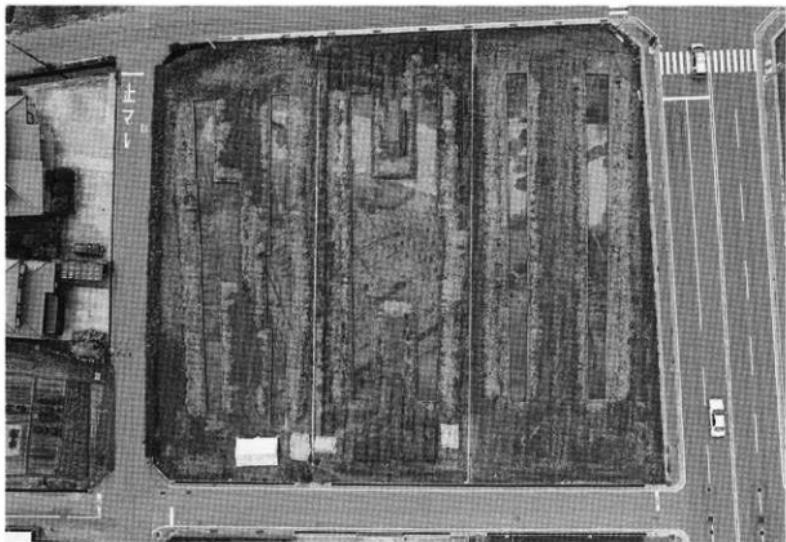


図 版 編

図版一〇一 東木津遺跡（田中医院地区）



1. 遠景（西より）

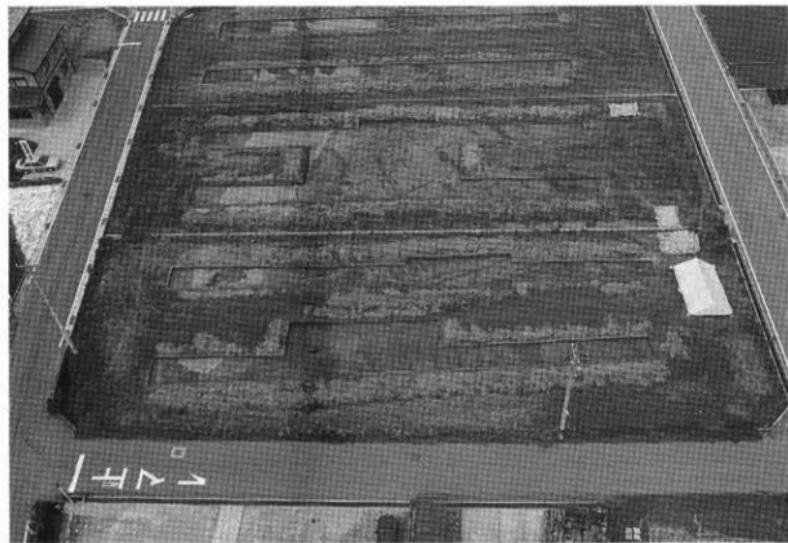


2. 大全景（上方より）

図版一〇二 東木津遺跡（田中医院地区）

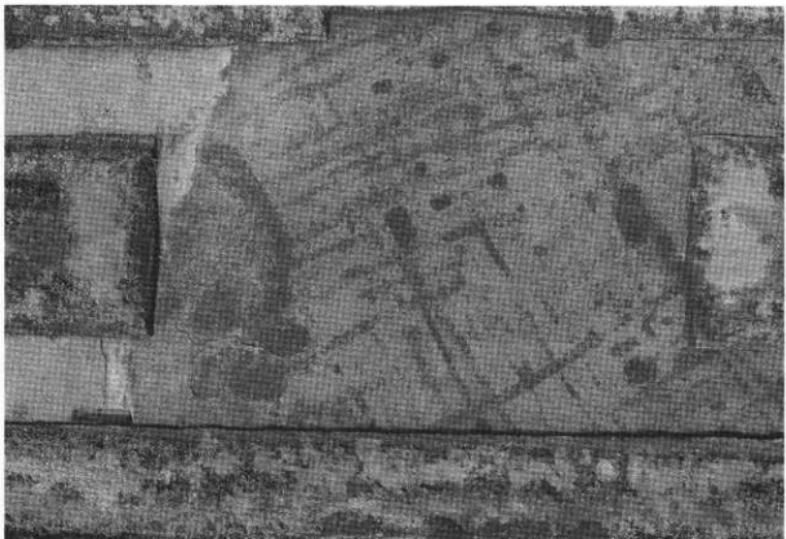


1. 全景（北西より）



2. 全景（南西より）

図版一〇三 東木津遺跡（田中医院地区）



1. 中央拡張区全景（上方より）



2. 中央拡張区全景（西より）

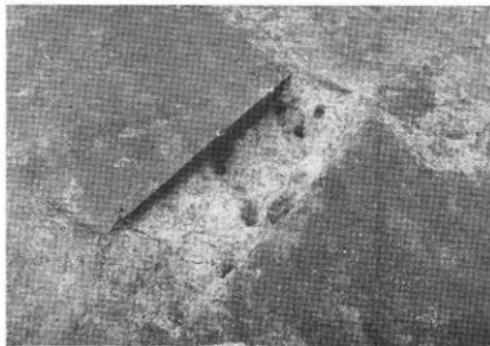
図版一〇四 東木津遺跡（田中医院地区）



1. 道路址 S F 01 全景（南より）



2. 道路址 S F 01 全景（北より）



東木津遺跡（田中医院地区）

SD08サブレンチA完掘状態（南西より）



東木津遺跡（田中医院地区）

SD08サブレンチB完掘状態（南東より）



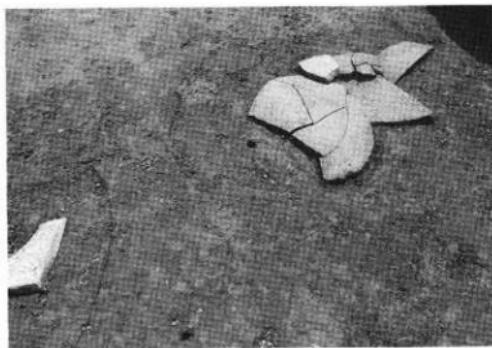
東木津遺跡（田中医院地区）

SD08サブレンチC完掘状態（東より）

図版一〇六 遺構写真

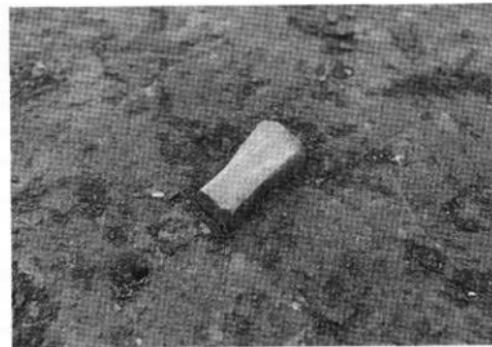
東木津遺跡（田中医院地区）

S D 07 遺物出土状態（北より）



東木津遺跡（田中医院地区）

S K 14 蛋石出土状態（北より）



東木津遺跡（田中医院地区）

S D 02 サブトレB遺物出土状態（南より）





瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）

調査地区今景（南より）



瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）

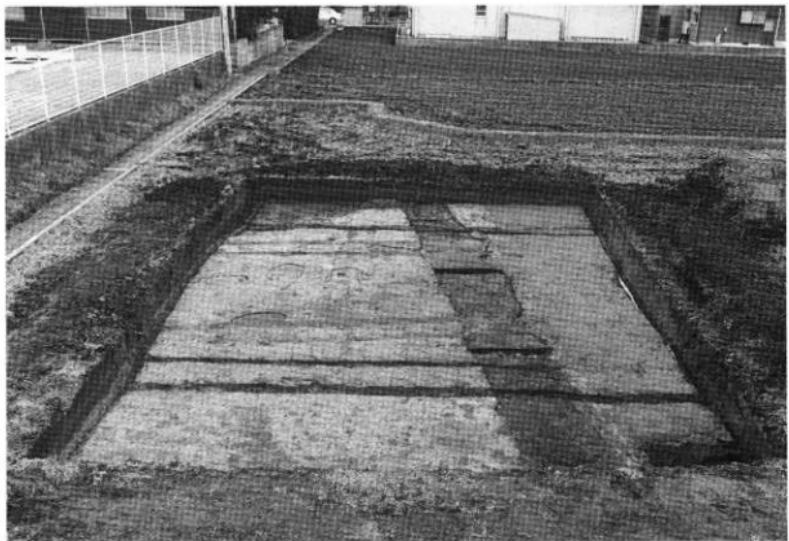
調査地区今景（北より）



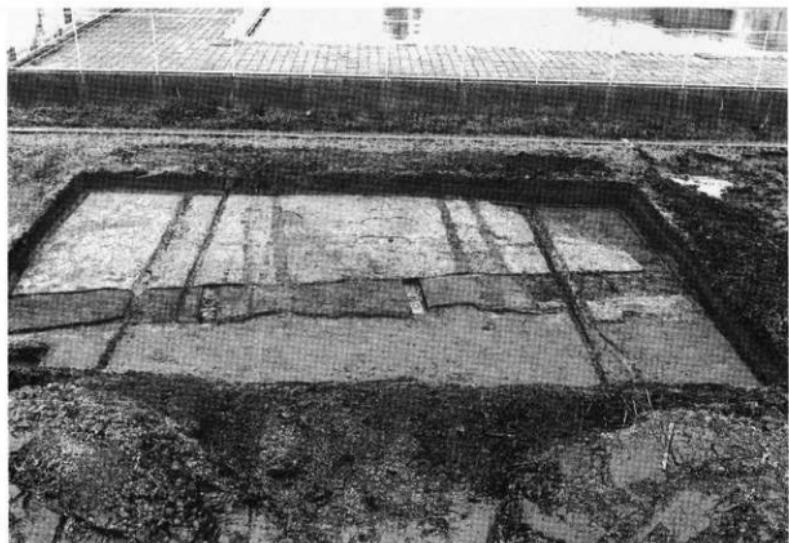
瑞穂町遺跡（大和ハウス工業地区）

SAK01発掘状態（西より）

図版一〇八 瑞穂町遺跡(大和ハウス工業地区)



1. 第5トレンチ全景（西北西より）



2. 第5トレンチ全景（南南西より）



東木津遺跡（鳥字地区）

トレンチ1



東木津遺跡（鳥字地区）

トレンチ2



東木津遺跡（鳥字地区）

トレンチ3



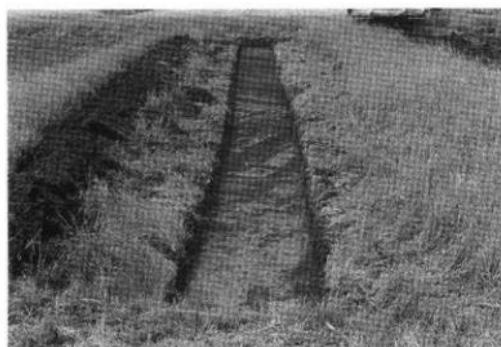
東木津遺跡（島字地区）

トレンチ4



東木津遺跡（島字地区）

トレンチ5



東木津遺跡（島字地区）

トレンチ6



東木津遺跡（島宇地区）  
トレンチ7



東木津遺跡（島宇地区）  
トレンチ3（南東部）



東木津遺跡（島宇地区）  
トレンチ4（中央部）



越中国府関連遺跡（奥村地区）

トレンチ1



越中国府関連遺跡（奥村地区）

トレンチ2



越中国府関連遺跡（奥村地区）

トレンチ2（作業風景）



越中国府関連遺跡（奥村地区）

トレンチ1（北部）



越中国府関連遺跡（奥村地区）

トレンチ2（中央部）



越中国府関連遺跡（奥村地区）

遺物出土状況SX02

下佐野遺跡（黒越地区）

トレンチ1



下佐野遺跡（黒越地区）

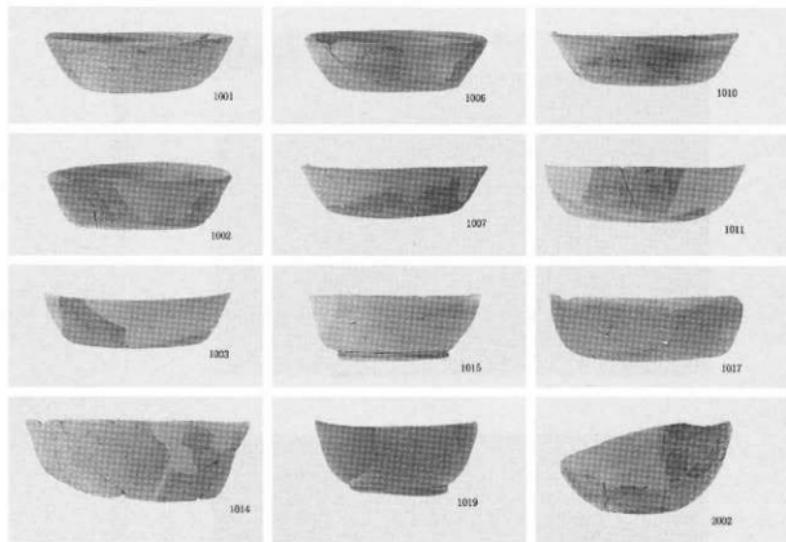
トレンチ2



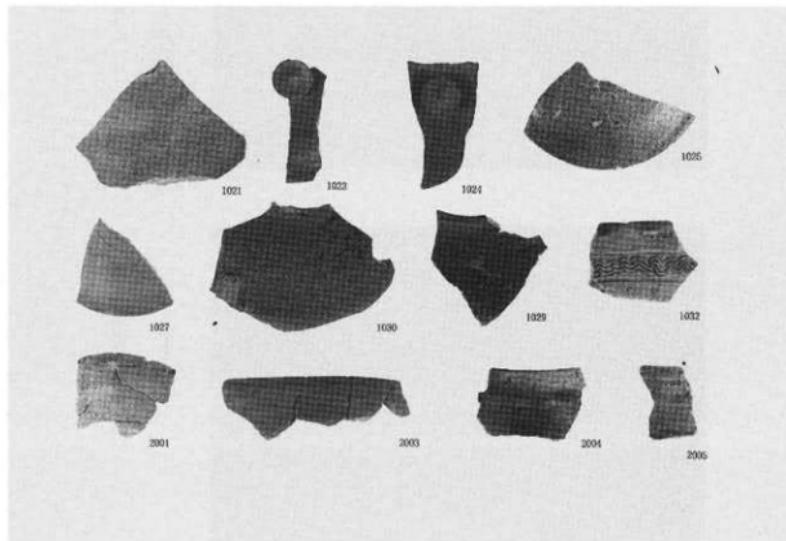
下佐野遺跡（荒木地区）

トレンチ1

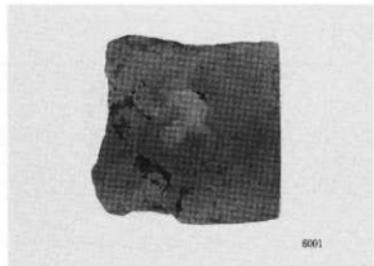




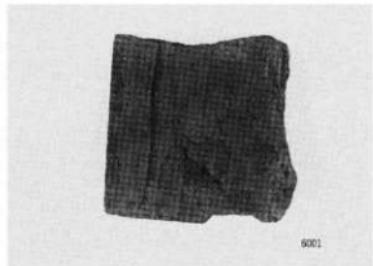
須恵器・土師器



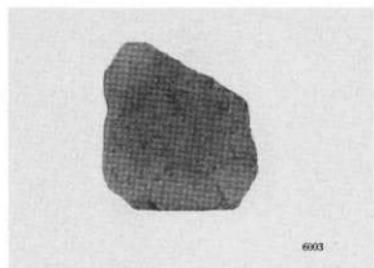
須恵器・土師器



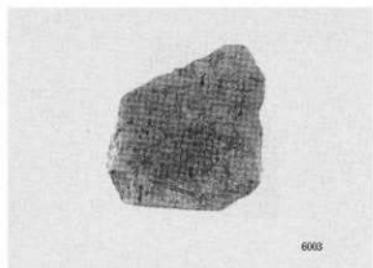
6001



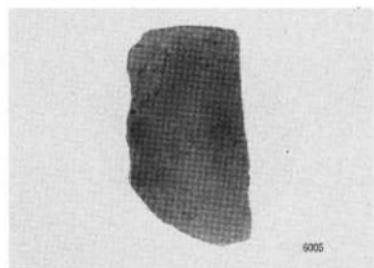
6001



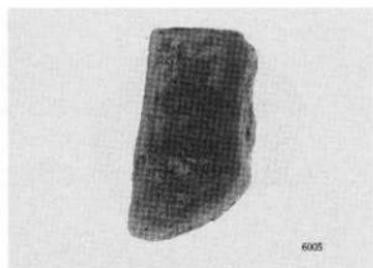
6003



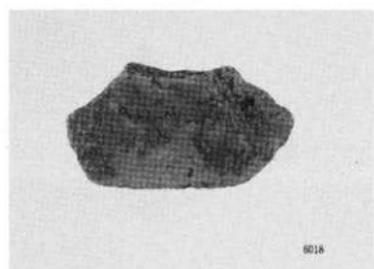
6003



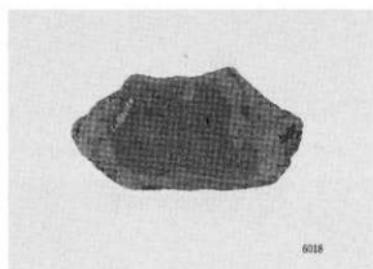
6005



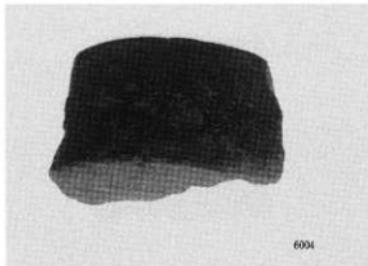
6005



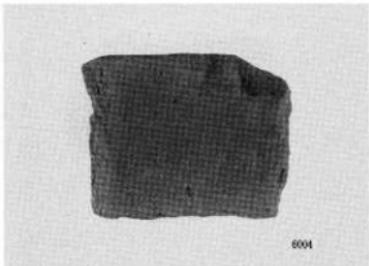
6018



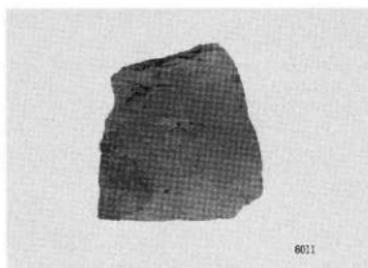
6018



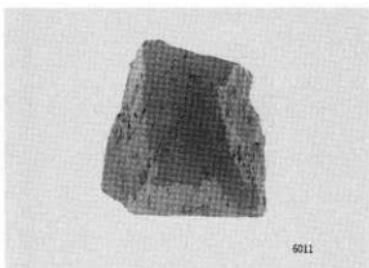
6004



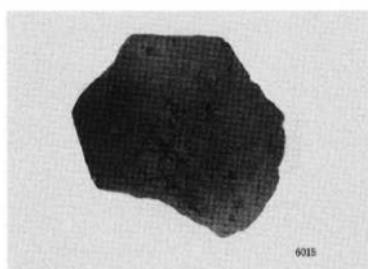
6004



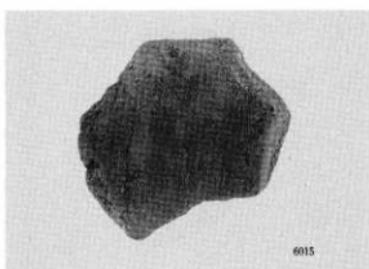
6011



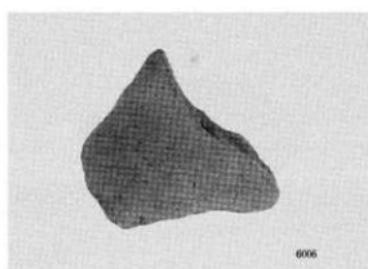
6011



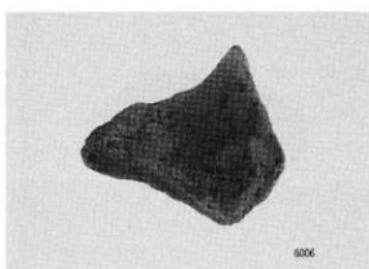
6015



6015



6006



6006



6010



6016



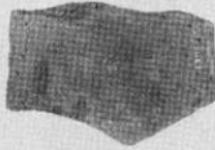
6013



6013



6008



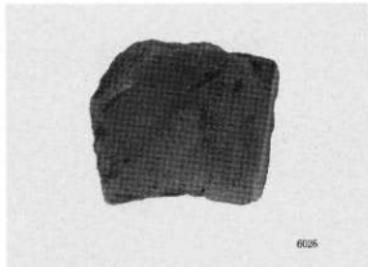
6008



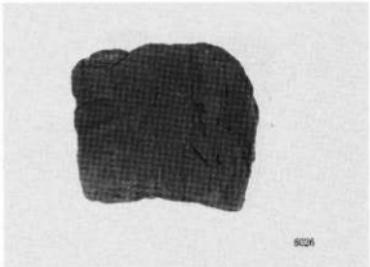
6012



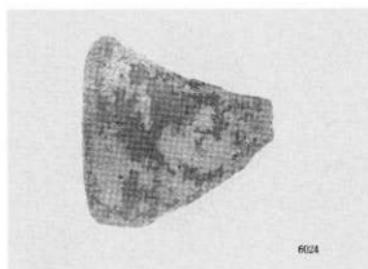
6012



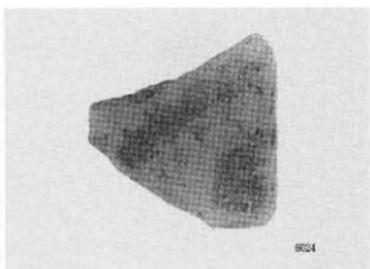
6025



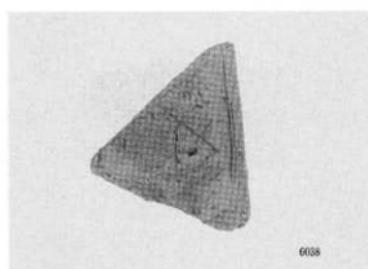
6026



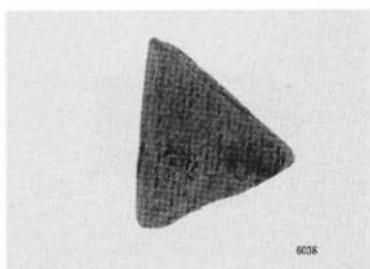
6024



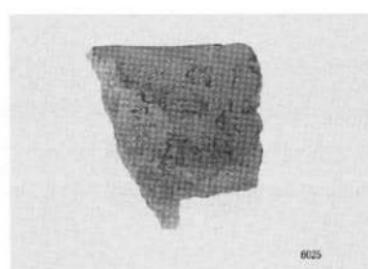
6024



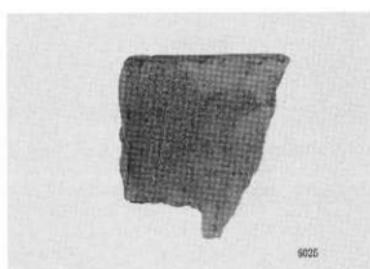
6038



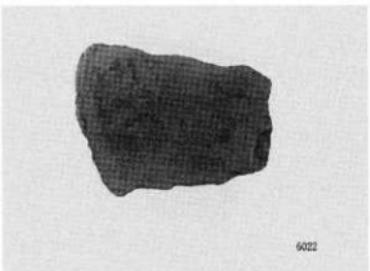
6038



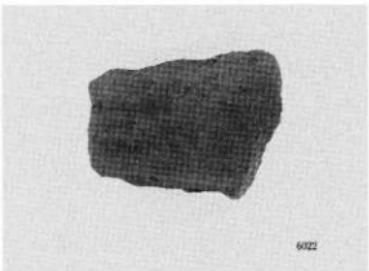
6025



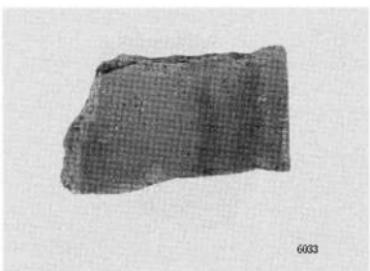
6025



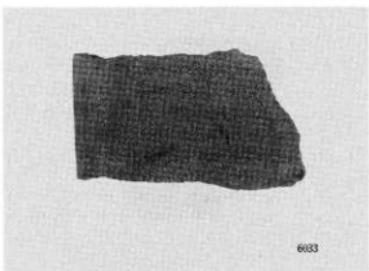
6022



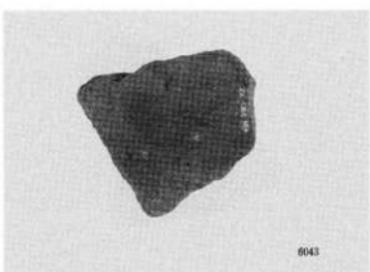
6022



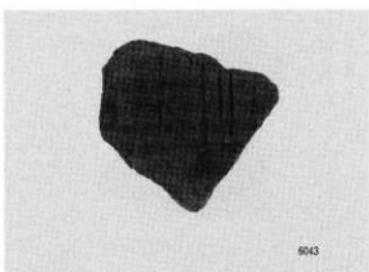
6033



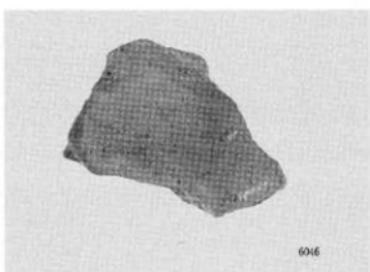
6033



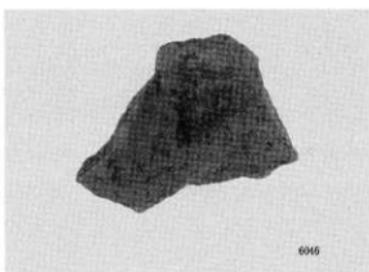
6043



6043



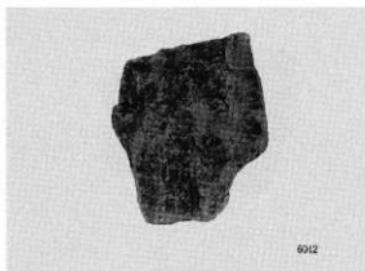
6046



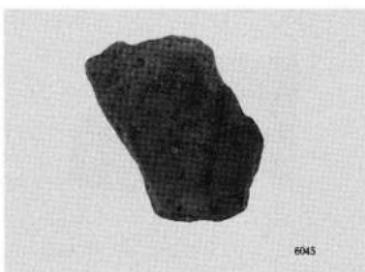
6046



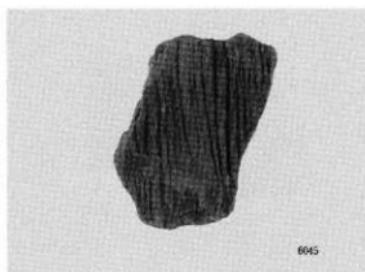
6042



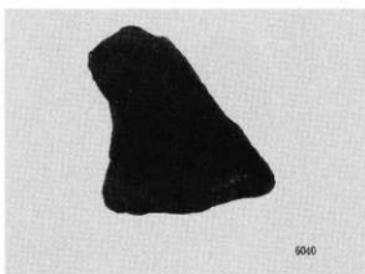
6042



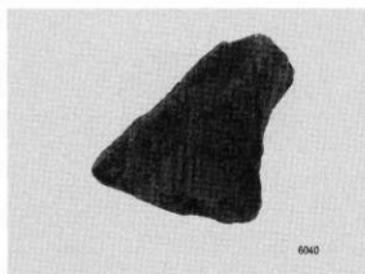
6045



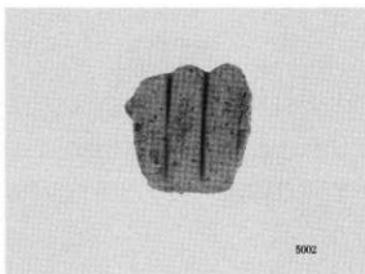
6045



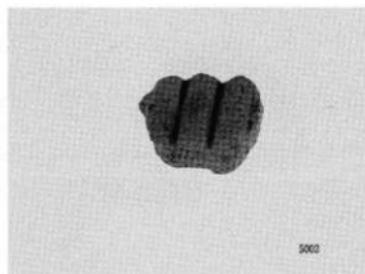
6040



6040



5002



5003

---

高岡市埋蔵文化財調査概報 第50冊

市内遺跡調査概報 X III

―― 平成14年度 東木津遺跡・越中国府関連遺跡の発掘調査他 ――

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2003年3月28日

印刷所 平田印刷株式会社

富山県高岡市野村1485番地

---